

---

# ～ さっちゃんの異世界流浪～

tiki

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「サっちゃんの異世界流浪」

### 【Nコード】

N1855V

### 【作者名】

tiki

### 【あらすじ】

白木サツキは“基本的に”平和主義である。ぐうたらで怠惰である。面倒くさがりである。外道である。——殺人鬼である。

望むまでもなく外道として生まれ、それを彼はどうしようもないものとして自覚して生きていた。しかし、ある時彼のいる世界とは異なる別の世界へと呼びこまれることとなった……。異世界に呼ばれた、性格や人格ではなく、本性が外道の殺人鬼の異世界の物語。

## 1（前書き）

オリジナルの小説が書きたくてもしょうがなくなった。

自分がどうしようもない悪党だと悟った時、笑うしかなかった。  
どこまでもどこまでも無邪気に。笑うしか。

やることなすこと全てがどうしようもない結果でしかなく、そして再び痛感するのだ。

生まれながらの悪党に碌な人生が待っているわけがないな、と。

その事実を、俺は、痛感する。ろくでもない奴にはろくでもない最期がぴったりだ。

だが、“不幸”なことに俺は悪党の中でも相当な規格外らしい。  
まだこの糞つたれのクソみたいな人生は続くようだ。

——そんなことを考えながら、俺を襲ってきたアホを拷問することにしよう。両膝を逆間接にへし折って嬌<sup>ひめい</sup>声をあげさせた後ソイツの背中に膝を立てて身動きを封じる。

周囲には絶命したどっかの特殊部隊らしきメンバーが横たわっている。皆、脳漿と鮮血を床へまき散らしている。そしてそんな惨状を息をするかのように生み出した人物はつまらなそうにしていた。180cm代の細身ながらも無駄なく鍛え上げられたスタイルの良いい引き締まった瘦身は黒と白のコントラストの服装のおかげでいかに映えていた。血に塗れていないかお気に入り स्टローハットを確認する。どうやら大丈夫なようだ。

ほっと溜息をつく青年。それはとても年相応であった。しかし、その足元にはその表情とは不釣り合いな広がつている。紅と散らばる肉塊、笑顔の青年。実に不気味だ。だが、先程の一連の惨劇を一流の殺人鬼が見たらこういうだろう。

——美しい、と。

そう、それは実に不本意ながらこういう表現をしなければいけない。あれは、最早神業だった、と。

「ぐっ!!」

「なあゝんで俺を襲った？ 身に覚えがありすぎてな？ どれがどれだかさっぱりなんだわ。……吐け」

「……」

「なんだあ。DMちゃんだったのかあ。すまんなあ、俺にそういう性癖ないから相性悪いわ」

「!! ぐああああ!!!!」

指をナイフでじつくりと一本一本三枚に下ろしていく。抵抗しようとし身をよじつてもどういう訳か身じろぎひとつ出来なかった。ゆっくり肉と骨が分離されていった。激痛に悶える男を見ても特に表情を変えずに口笛を吹きながら“作業”を続ける。

そして全ての指が下ろされたあとに、頭を掴まれて思い切り床に叩きつける。めきよ と骨の歪む音を無視してあっさりと近くにあった椅子に引きずり上げられて拘束された。

「次、鼻な？ その辺踏まえて、良く考えろよ？ だゝゝれに雇わ

れた？　なんで俺を襲った？」

そう問いながら、先程まで飲んでいた缶コーヒーをちびちび啜る。近くの机の引き出しをガラリと抜き去るとその中にはペンチが入っている。そして無理やり先程のやりとりで折れた鼻を矯正してやった。そしてそのまま挟んだまま質問がなされた。

「・・・死ね」

「ああ、やっぱりやめた。悪いさっきの嘘。まずはコッチにすべきだったな」

そして、無造作に突き出された指はその男から光を奪った。

「次はバナナみたいに剥ぐよ？　素直に吐けば楽になります。な、簡単なことだろ？」

・ ・ ・

「――何だ。またそれかよ。本当いい加減にしてほしい」

びくんびくんしてる死体を余所に俺は溜息をつく。もう、うんざりするくらいの鬱陶しさだ。

今回の襲撃の原因は、俺がこんな外道の悪党に堕ちる要因の一つとなった俺の両親への復讐だった。

両親についてはここで詳しく語る必要もなければ、意味もない。ただ俺の両親、いや一族全てが殺人鬼であるという事実があれば説明にこと足りる。そしてそんな狂人たちの中でも、父母共に最高で最悪だと持て囃される位の“殺人”の才能があったというだけだ。

最も一族全員死んで……いや殺された。俺に。

壮大な暇つぶしの道具だったのよ。俺が。

簡単にいえば“鬼”を完成させること。一族で最も才能のある人物同士の子供に代々と英才教育を施し、“鬼”を目標に育て上げることが先祖から脈々と伝わる慣習だったらしい。そしてそれは俺の代に花開いた。

人を殺すこと、という限定的なものではない。殺すと決めたら

何であっても殺しつくす。それを目指してきたらしい。故に業を、血を、才能を、全てを磨き選別してきた。

数多の流血と死体の上で俺は生み出された。

そして確認作業の集大成として俺は一族全員と予行練習をしたわけだ。全ての業を伝承しながらその全てを俺の糧にした。

『最高の殺人鬼に殺されたかった』

両親の有難い遺言で、俺を生んだ理由である。他にないのか？あるよね？！ と言ったら笑顔で首を横に振ってくれた。恋する相手を見るようなキラキラした眼で。ああ、外道。俺は生まれながらの外道である。呆れるしかない。

彼等や他の正常な人間と俺は決定的に違う。殺しても精神が揺らぐことはない。ハイにもローにもならない。それがどんな存在であっても。如何なる時でも正気でいられる。

好き嫌いの感情に殺しは関係ない。行為に心は関係ない。全てが自然なのだ。肉親でも恋人でも分け隔てなく殺る時は殺る。そう、それとコレは話が別。そんな次元の話に俺の中では成ってしまう。

うん、異常だ。

別段、破壊衝動があるわけでもないが、決定的に歪んでいるのだ俺は。捻じれまくって真つすぐになつた存在だ。

そおんな本人の意思関係無く“鬼”になつちやつた人間の名前、つまり俺の名前は <白木 サツキ>という。いやもうね、名前は片仮名でいいよ。その方が普通だし。なんならさっちゃんでも構わない。フレンドリーな人間が比較的に好きな“外れた男”。黄昏ながら歌う さっちゃんはね〜・・・あれ、地味に暗いし怖いよね。一番だけでやめておこう。

——そうして生まれてこのかた十七年間殺し以外とは無縁の生活だ。一人になつても一族全ての恨みを買って、ひたすら返り討ちにする日々が続いている。

普通なら精神が摩耗なり何なりするのだろうが、俺にとっては毎日の朝に新聞を読む感覚だ。特に思うことはない。こんな境遇に俺をおいた家族あほどもにも特に思うことはない。ああ、アホだな位だ。あ、あと面倒くさいことしてくれたってこともかな？

何がしたかったの？ いや、わかるけどさ。非生産的すぎるだろ。

いたって俺は平和主義な殺人鬼なのだ。手出ししなけりや仕事以外は何もする気ないのに。あゝ、久しぶりにパチンコでもやりたい。そして全部スツてきちゃうんだろうな・・・。

そんなことを考えていると、目の前に大きな鏡のようなものが現れる。アレ？ 何コレ？

なゝんか、嫌な予感がするよ。えゝやだやだ。こんなメルヘンな世界へご招待なんていかにもな展開。前にTVつけた時に似たようなことアニメでやってたんだよ。こんなのTVや漫画だけにしておよ！それに俺に何か頼むんなら。……えゝと。

もつと、こう、スタイルの良い美女が俺を迎えに来てくれてベッ  
ドインみたいな？ そんなご都合主義展開が俺を待っていたらしい  
のに。いや、冗談はさておきこれなに？ すんごい吸ってくるん  
だけど？ ダイオンもびつくりの吸引力だよ？ さっきまで拷問し  
てた死体なんかあつさり吸い込まれたし。

いや、頑張つて踏ん張れば何ともないけどさ？ なにこれすごい。

ちよ？ あれ？ 部屋のドアが飛んでk・・・おお？ やべ、体勢くずし

そうして俺はメルヘン入りした。家ごと。

## 1（後書き）

感想が作者のやる気の原動力となるので、出来れば何か一言頂けるとうれしいです。それを糧に文章力とストーリーの質向上に努めたいと思います。少しでも読者の方々に面白いと言っていただける作品を目指してがんばります。

ああああああああああああああ

そんな感じだ　メルヘン入りの　第一声

洗濯機の中に入れられたみたいに俺はぐるぐる回りながら不思議空間の中から解き放たれた。いや、ちょっと酔うよ？　これ？　おえつぶ……ふう。

だが、この先には俺の幸せな新生活が待っているはずだ。ああ、もう風呂に入ってるとき、女と寝てるとき、飯食ってる時、クソしてる時に襲撃されるなんて滅多にない新生活。……ああ、夢のようだ。（あまりの急展開に現実逃避中）

お。……さあ皆さんやってきました。光が見えてきました。トンネルの出口みたいに光が差し込む出口っぽいのが見えてきました。俺の、白木サツキのサクセスストーリーが今始まる！！

——そして閃光と共に、どっかのお城の広間みたいな所に何か召還された。そして俺の前で拡がる光景。目の前でゲラゲラ笑うおっさんとそれを取り囲む鎧着た兵隊さんたち。いや、何この状況。

得意げに笑うおっさんとそれを見て悔しそうに顔を歪める兵隊さんの隊長らしき人。

・ ・ ・ ・

え……嘘。うそ〜ん、やめてよ。いや、状況が全然把握できません。いや出来るけど。俺は認めたくない。そう俺は認めたまきゅ、・  
・認めたくないのだよ。だってそうでしょう？ こういうのはファ  
ンタジーお決まりの可愛い子が……。え？ ああ、電波な脳みそ  
の俺が悪かったの？

ええええええ、まさかのむさい おっ さん ですか！？  
俺召還したのおっさん？！ ねえよ、本当、ねえよ……！！ いや、  
これは俺が悪いんだろ、人生初体験にワクワクしてしまった俺の  
油断が招いたことイヤ違うそうだゆめにちがいなあああああああ  
あああ！！！！ やっちまっただあ！！

「hadu,kaie,jnicspc! djopus!」

「nobus!!!!」

いや、何か目の前では劇場が始まってるけど。何か高笑いしながら  
精悍なおっさんが演説してるけど。

もういいよ、俺お腹いっぱい。心なしか目の前が真っ暗になって  
きた。やっぱ高望みと無計画はダメ、ゼツタイ！ だった。新手の

キャッチセールスに騙された気分だ。勿論クーリングオフは不可です。

やだやだやだ!!　こんな、こんなおっさんが・・・

「さあ!!　手始めにこいつ等から血祭りにしてやれ!!」

おっさんが何かぶつぶつ呟いたと思ったら、周りに円陣が出て言葉が分かるようになったよ？　そして俺の掌に何かマークが。何コレ？　あと、命令？　え？　俺に？

得意げなおっさんが怪訝そうにこちらに振り向いたので、俺も小首を傾げる。

「お前何言ってるの？」

「……は？」

ぽかーんと間抜け面を晒すおっさん。何か周りではへんなバリアっぽいのが兵隊さんがこっちに来るの妨害しててこっちとはまるで

空気が違う。

まるで道路工事のような騒音をBGMに見つめ合う俺とおっさん。嫌すぎる。もううぜえ位に連呼してるけど、嫌なものは嫌なんだよ！

「な！？ 服従の呪文が効かない?!」

「……催眠とか暗示の類か？ いや、普通の人間と一緒にするなよ」

そんなものが効く筈が無い。その手の訓練は一通り受けている。というか意味ないよ？ 本当に。精神構造の根元がイカしてる人間に効果があるわけがないよ？ 俺、親しげに話した親とか親友殺してもほんとに何も思わなかったクズですよ？ 確かに目の前の人間が神みたい最上の存在で犯すべき存在ではないと何か異物っぽい声が頭で響いてる気がする。だけど、それがどうしたよ？ もう呆れるしかない俺は深い溜息をつくしかなかった。

「え、ええい！！ ならば、もう一度！ ……我が言霊に従い」

「黙れ」

そう言ってから、妙な言葉を紡ぎだすその舌を引っこ抜いた。ぶちん、と音を立てて千切れる。一瞬すぎて何が起きたかわからない

でいるおっさんに、そのきもい物体をもう一回口に詰めてやる。あ、やべ。きもすぎてついでに歯十本ぐらい折っちまった。

口を抑えながら呆然とするおっさんをゴミを見るかのような眼で見下ろし吐き捨てる。

「ああ、きもいきもいマジねえよ。それに良く見たら周りにあんの俺の家つぽい残骸じゃん！ なにしてくれてんのお前——ってかやることなすこと全部大損じゃねえか！！」

そう憤りを込めた訳の分からないツツコミを入れるついでにおっさんの頭を弾き飛ばした。

ああ……知ってはいたけど、世界は悪党に敵しすぎるぜ。

俺は世の無情を嘆くしかなかった。思わず眼元を覆って天井を仰いでしまった俺を許してくれ。  
ああ、本当に“運がなかった”。

てんてんてん

アホ面晒しながら硬直して転がるゴミ。それを見下ろしながらふと小さい時の童謡を思い出す。

何だっけ。確か爺さんが川から流れてきた婆さんの生首を追いかけて宝の山を当てる昔噺だったけ。なつかしいぜ。掛け声はなんだったっけかなあ？ けっこう特徴的だったな。そうだ、すってんころりんだったな！

俺の場合は人生がすってんころりんしちまったよ、ボケが。いや、それ最初からうまれたときだったわ。

何か笑えてくる。何でだ？ ぎやははは。

今日の俺サイコーだ。何か知らんがいける気がしてきたな。ぎやはははは。

げらげらげら……やべ、治まらん。そうだよ。良く考えたら俺生まれて初めての本当の自由じゃねえか？ 俺自身の柵しがらみはともかくとして煩わしいものとはお別れできたんじゃない？ 別にそのままでもかまわねえけど。取り合えずはプラス思考だ。

ああ、何だろう。この解放感。そう、バカンスだ。そうだ、バカンス楽園だよ、おい。楽園に來ちまったんだなあ。—— 枷が無い世界に來た。

げらげらげらげら

周りを見渡す。あまりの（自分の）間抜けッぷりに狂笑する俺をいい感じの殺意が包み込んでる。俺の歡喜<sup>じゆう</sup>を祝うように皆が俺を中心にして敵意をぶつけてくる。いいね、いいな。

「さあてさあて、かつこいい正義の味方のお兄さん方あ。そんな熱の籠った視線ぶつけられると、僕ちんチビっちまうぜ？ 至って平和主義なのよ俺。だからそんな視線ぶつけないよ」

ぴちゅってしたくなるから。

「……」

ああ、ヤバい。何がヤバいつて？ そりゃ久し振りに血が滾って

る。夏休み前日の子供クラスのレベルで沸騰してる。ん？ 大したこと無さそう？ おまえ長期休暇舐めんな。というか纏まった休みを取れるのなんてガキと大手正社員の特権だぜ？

「俺、被害者。今の正当防衛。あーゆーおーけー？ だから取り合えずはこの辛気臭っせえ場所から出ていかせてもらっわ、じゃな」

にこやかに手を振り、どっかの国の大統領を想わせるような胡散臭っせえ笑みを浮かべながら其処から立ち去ろうとする。ハイ、一歩、二歩お……

「……召還されし悪魔に、死を！！！！！！！！」

やっぱり、駄目でした。

あゝあ、あんたには言ってなかったがな。俺はうだうだ平和主義やら面倒臭いとか言ってるけどな、どこまでいっても畢竟、殺人鬼——糞と肉の詰まった皮袋を解すのが誰よりも巧いんだわ。

さあ、綺麗にすつか。いつもの台詞を口ずさむ。

「——『くろっさん』」

今まで生きてきて、努力して、ここでさして意味もなく潰える。  
ならせめて俺が餓<sup>はなむけ</sup>の言葉を贈ってその苦勞を労うしかあるめえ。長い長い数十年かけて描き続けた血の色の絵巻の集大成なんだからないや、ほんと。御苦勞さま。

ここは大魔術師・オーヴァンの工房。帝国における造反や危険因子の抹殺を任務として担う我々“影狗”のここ十年における最大の標的の陣地に潜入した。いや、潜入と言ってももう察知されている

が。

流石に己の城とでもいうべき魔術師の工房。魔術に武技にと精通している我々でも見抜けないものが多々ある。それがこの国の頂点に位置する魔術師のものであるならば皆まで言う必要はあるまい。

四人もの精鋭の犠牲を払ってようやく目標としている部屋へ辿りつく。扉ではなくその直ぐ側の壁に魔術符を張り、何か罫を仕掛けていないかを調べる。仲間内では一切声を出さずに眼で意思疎通し、各々の作業へ移る。十名の部下の内の三名はこの内部に隠されているであろうオーヴァンの禁忌の魔道具の徴収へあたらせた。

オーヴァンは元々は愛国心溢れる魔術師であった。数多の政策と優れた魔道具を開発し帝国の一層の繁栄の一助となった。皇帝もそんな彼を信頼していた。だが、全ては彼の弟が馬鹿な大公に謀殺されたあとから崩壊は始まったと報告にあった。

帝国内の幾つかの村落が不自然に“村ごと”消える事件。最近激突したデュオニス帝国との戦争。周辺諸国への物資の密輸。そして先の大公の殺害事件。それら全てがこの墜ちた魔術師の仕業であるようだ。

紆余曲折あったのだろう。私自身としては彼が何故反乱を企てた

のかなど興味はない。与えられた任務は果たすだけだ。

そうして準備が全て整ったことを確認し、私は手を掲げる。

一斉に魔力を練り上げて剣を掲げる。そうして私は——手を振り下ろした。

ドン！ と壁を突き破り一斉に突入する。しかし、入った瞬間に感じた、その禍々しい魔力の渦を見て思わず冷や汗が流れる。それどころか直接臓物に氷を流しこんだかのように、ぶるりと背に奔る。

凍てつくような冷氣すら感じさせる魔力……とても正常な人間が出しているものではない。

『憎しみ』 その広間はソレで満たされていた……。

「——来たか」

魔術師なれど侮ってはいけない。このお人は策謀だけではない。かつての大戦においてその身一つで幾つもの死線を潜り抜けてきた

古強者であるのだから。実際このように相對して、わかる。

いまだに力に衰えは無い。長期はわからぬがここで一戦する分には関係ないのだろう。

「オーヴァン殿、あなたには捕縛の命令が出ている。叶わぬのならば殺傷も許可されている。投降を勧める」

「ハッ！ 今更何を言うか。芯から腐り墜ち見捨てた国に今さら頭を垂れるものか。我が弟、いやその影で虐げられてきた我が族の恨みを果たさせてもらう」

「…しかたありませんな」

手の内にある剣に再び魔力を纏わせる。一斉に密度を持って渦巻くソレを見てオーヴァンは鼻で笑う

「ふん。未熟な魔力制御だ。それで精鋭とは聞いてあきれる。このまま相手してやってもいいが、いいものを見せてやろう」

そう言って杖を一振りする。天井と壁に下げられた燭台から灯りがぼつと灯る。そして周囲を取り巻く異常な光景を見て思わず息をのんだ。

四肢が欠損した数多の死体が規則正しく置かれていた。それは術式なのだろう。血で描かれた紋様を書く使い古した筆のようにそれは至るところに無造作に置かれていた。

「貴様あ!!!」

私の隣の部下が思わず声を荒げる。私は改めて確信した。誇り高き大魔術師はもう死んだのだ。目の前にいる男はもうただの外道だ。しかしそんな今にも噛みつかんばかりの剣幕など意にも介さずに口元に笑みを浮かべながらこの催しの挨拶を始める。

「今さらこの腐った国の民を殺したところで何も感じないさ。それよりも注目してほしい。これが何の術式なのか……」

そついいながらも魔力を込める様からは嫌な予感がする。気付かれぬようにハンドサインで指示を出して死角から葬ろうとしたが……

「これはな？　かつて太古の時代、異世界からの異人をこちらに召還するという失われた魔法だ。ああ、何かしようとしているようだが無駄無駄」

それは既に想定内の行動であつたらしい。障壁が全てを遮り、逆にこちらの攻撃を全て跳ね返す。

「かつてはこの世界に存在した魔王を討つための尖兵として召還してらしい。当然ソレに適した者を選別はしていたようだが……それはいい。だがな？　少し弄べば幾らでもその術の本質は変えられるものなのだ」

まずい。何をする気なのかは知らないが、ここで止めないと何か取り返しのつかないことが起きる予感がする形振り構わずその障壁を超えようとするが中々破れない。

「故にだな？　私はこれから、異世界の中でおいてとてつもなく強大な力を持つ“化け物”を呼び出そうと思う。……滅ぼそう。この国を滅ぼすことを可能とするだけの絶大な力を有する化け物を使役してな？　ああ、そうだ。私は悪魔を召還しようと思う。選別の設定はこうだ。――“全ての人間の天敵の象徴”」

まずい、まずい。これが並の魔術師ならいい。十中八九自滅するだけだ。そんな人の手に余る存在を使役出来るわけがない。だが、大魔術師オーヴァンは違う。

この男はこの国の全ての魔術師の頂点に坐する。そしてかつての大戦では飛竜の召還・使役などという偉業と実績を持つ。その圧倒的な魔力ならソレはふざけた夢物語ではなく……。

ボウツ！　と紋様全てが妖しく光る。この空間に渦巻く全ての魔力と死体の晒された心臓を代価に――その存在はこの世界に呼

び出された。

黒い歪みのような穴が空間に開き、様々なものを吐き出していく。吹き飛ぶどこからともなく残骸。家具らしきものがそこに吹き飛ば。時折何かの肉のようなものもそこらに飛び散っていき、最後にその化け物は呼び出された。私は思わず畏怖の念をその化け物に抱く。

肉塊をこの身に纏わせながら現れた青年。周囲の様子を見渡しどこか落胆したかのようにその<sup>まなじり</sup>眦を下げた。しかし、私は恐怖する。その身に纏う、深い深い湖のような奥が見通せない静寂とし泰然とした魔力に。静々と治まっていくものの召還において無理やり引き出されたソレは人間の域を超えていた。いや、それよりもだ。何よりも気持ちが悪い。

それを見た瞬間に駆け巡った悪寒は何とも言えない。ただ、漠然と確信するしかなかった。

——あれは、生かしておいてはいけない存在であると。

今はその禍々しい奔流は完全に治まり普通の人間にしか見えない。だが、それは明らかに異質な何かだった。

「ふ、ふははははははは！……何と素晴らしい。……これほどの禍々しさとは。想像以上だ」

「き、貴様あ！　これは、こいつは！　明らかにここに在ってはならないものだ！　お前は自分が何をしたか！」

「——ああ、わかつてゐるさ。完全な化け物と呼び出したな。これで帝国は滅ぼせる。脈々と受け継がれたこの身を焦がす程の恨み、憎しみ、苦しみ！！　その全てを晴らす時が遂に來たのだ！！」

そうして使役のための服従の呪文を唱え始める。これが完成した時完全にあの魔人と呼ぶべき化け物は忠実な下僕と化す。そしてその力は必ず帝国の災いとなる。

我々が何とかその凶行を止めようとするも大魔術師の障壁は固かった。しかし、こうしている間にもどんどん術は完成していく。絶望しか、見えなかった。

「長かった、雌伏の時間が報われる！　ようやく全てが始まるのだ！」

「くそが!!」

しかし、無情にも全ては間に合わなかった。服従を強制するその呪印が刻まれた……。もう、奴はオーヴァンの完全なる支配下におかれた。

勝利を確信したオーヴァンはもはやその凄絶な表情を隠そうともせず、自らの呼び出した“悪魔”へ滅びの足がけとして命令を下した――

「さあ!! 手始めにこいつ等を血祭りにしてやれ!!」

――が、悪魔は何も反応しなかった。悪魔は無表情で小首をかしげる。その掌に刻まれた刻印を見つめながら。

「お前何言ってるの?」

その眼はどこまでも冷たかった。道端の小石を見るかのように、彼は見下ろしていた。

「な、服従の呪文が効かない?!」

そこからはあっけなかった。

狼狽しながら再度呪文を掛けようとした哀れな男はその舌を引き抜かれた後で首を撥ねられてその最期を遂げた。何もかも、ここまでの生涯における積み重ねたものの全てがまるで砂城のように崩れ去ったようだった。帝国に滅びをもたらそうとした魔術師は自らの滅びを招いた。

目の前で狂笑する悪魔を見て私は決意する。

コイツは生かしておいてはいけない異物だ。この我等と同じ姿をした悪魔は自らの神でさえ躊躇わず殺せる本当の怪物だ。

——必ず、この化け物を殺す。

そつ心に刻んで帝国の誇る精鋭達はヘラヘラと齒をむき出しにして笑っている奴に向かって踊りかかった。

一番最初に突撃に合わせて死角に潜む仲間が矢を放つ。しかし、それは突き刺さるところかいつの間にかヤツの掌の内にあった。突如、左の瞳から光が失われる。驚愕を感じる間もなく残された片目には目の前で行われる惨劇が映っていた。演出も何も無い。陳腐な演劇だ。さんげき

——私のすぐ側を奴がゆっくり通り過ぎる。誰もそのことに気づいていない。

背後で詠唱していた部下は、魔力を放つ瞬間にいつの間にか背後に現れた奴によって頭の前後が入れ替わった。照準の外れた風の魔法によって部下二人が背中から血と肉を噴出して死を迎える。先程弓を放った男は、何時の間にも投げられたのか、私の眼に突き刺さっていた筈の矢が喉元に刺さって絶命していた。

ゆっくりと身体から力が失われていく。

固い石床の冷たさをその身で感じた。

残った三人の部下がようやく気付いて、眼を剥いて背後を振り変

える。

しかし刹那の内に接近し、一人の首元がすれ違いざまに掻き切られた。背後で吹き出す鮮血を潜り抜けるように二人目は蹴りによって弾き飛ばされ、吐き出された残骸で出来た鉄の槍の筵むしろうに自ら突っ込んで血の華を咲かせた。

絶叫が響き渡る。

——落ちていた剣を走りながら拾い、悪魔は最後の部下に向かって疾走する。

——部下も一魂の雄たけびをあげて突進し迎え討とうとする。

そして

交わり

弾け

身体だけが前進を続けた。

その光景を見せつけられながら、最後の力を振り絞る。このまま死ぬわけにはいかない。一矢報いる。そうして倒れ伏したその身を何とか起こし、こちらに背を向けている悪魔の背中に突き立てるべく傍らに転がる槍をその手に掴んだその瞬間、失われた場所でズプリと音がした。

最後に見えたものは、こちらを向かずに振り切られた腕と

「——」  
「くろくさん」

——  
無情すぎる末路だった。

## 2（後書き）

一話一話成長していけたらいいなあ、と思います。特に戦闘描写。  
そしたら別作品にとっても＋になりますしね。



凍えるような石の床は紅に染まった。数多の想い——忠義、憎しみ、使命感、悲しみ……それら全てが等しく灰塵と帰した。

その見慣れた光景の中で考える。ようやく解き放たれたのだ。これからは己の思うように道が開け、そして同時に狭まって行くのだろう。俺自身の行動によって。

はつきりいつて異物である俺はどのようにして生きればいいのか。

「さあて、そろそろ冷静に考えつか。これからどうする？ お？」

顎に手をやって考え込む俺の掌が急に光始める。そういえばこのマークなんだ？ そう思っていると、どこからか知識、いや記憶が流れ込んでくる。それと、魔力も。

流れてきた情報を有用なものと不用なものにフォルダ分けしていく。どうやら俺にとってはかなり都合の良い事態だ。運は俺に向いているらしい。

どうやら俺にかけたのは呪いの一種で服従の呪文というらしい。禁術として指定されている大魔術で高度な技術が求められる。簡単

に言ってしまったえばハイリスクハイリターンな魔術だ、といえる。使用者は使用した相手を己の魔力によって刻んだ呪印を媒介として自在に統制し、自我を奪うことが出来る使役呪文。だがこの魔術を完全に解かれた時には己の全ての力を奪い取られる、という制約があるようだ。

あのおっさんは相当に腕の良い魔術師で俺を支配下におけると絶対の自信があつたようだが、知性の低い化物ならともかく人間と同等の知性を持ち、しかしそれでいて精神構造が根元から違う俺に術はあまり効果がなく結果として己の死を招いたようだ。

そうしておっさんの全ての知識と記憶、魔力が俺に譲渡され、有用なものだけ取り込んだ。

「……ふん、悪魔ねえ。俺を召還した動機はどうでもいいが、『魔力』か。要領は内氣みたいなモンかあ？ ほいっと」

自分の中にある妙な熱のようなものを、普段から使う内家の要領で、丹田を中心に意識を集中するというのではなく身中に渦巻くこれまでではなかった“異質”を感じ取ることに集中することで見つけ出す。

この作業は身の内に混じった毒を集めて口から吐き出せるほどの業を誇る彼にとってはなんてことではなかった。そして記憶として取り込んだ魔力の操縦感覚に従って、ポンツと掌から出して球体状に形を保つ。それを知識に従い、一番基本的な呪文を唱える。

「燃えろ」

その魔力がまるで火の球のように消えた。「ほお〜」と久しぶりに珍しいものを見て面白そうな顔をする。

「ハッ、おもしれえ。こりゃあつちにもし戻ったならマジシャンとしてやっていきますう？」

そうして鼻で笑う。まあ真新しい玩具が入ったような気分だが、実際の殺し合いでは中々使う気にはなれない。詠唱なんて手順は面倒だし、初めて扱う武器をいきなり実戦に用いるのは好まない。勿論必要ならば使っし使いこなせる自身はある。これまでもそうやって生きてきた。

だが、それよりも身体強化や外家の技法に良く似た要領で魔力そのものを発動に利用する方が使い勝手がよさそうだ。

そう、新しく手に入れた『魔力』と概念を殺し合いに利用する上ではそう評価するに留まった。特に特別視する必要もなかった。所詮その程度だ。使用できるがまだ“業”とは言えないのだから過剰に評価はしなかった。まあライターがなくても火が出せるなど、実生活では殺しの業なんかよりもずっと役に立つ技術だとも認識した。寧ろそっちに思考が移っていた。

しかし、継承した情報には無視できない記憶があったことも思い出す。帝国の反逆者の魔術師に怪物として召還されて召還主を殺した。この事実から推察できること。下手を打てば楽園どころではなくなるだろう。再び、殺し殺されの殺伐人生の幕開けとなるだろう。だれも慣れているとはいえ、そんな疲れる事態に望んでたくない

ならば、さっさとやることを済ませてしまおう。

「さあて、——そこにいるお二人さん？ 悪いけど色々と試させてもらって、それから……死んでもらうわ」

そして俺はこの崩れた広間の壁の裏にいた二人の生き残りに死亡通告を出した。様子を窺っていたのだろうが、無駄無駄。

バレたことに気付き一斉に走り去って撤退しようとする。恐らく俺の情報を“上”へ持っていくつもりなのだろう。宝物庫から持ち出してきたと思われる魔道具を放り出して逃走した。——早速この魔術とやらが役に立ちそうだ。

思い切り足で床を踏むつける。足元から溢れ出るようにあらゆる術式が一斉に壁ににじみ出していく。この工房と言う名の結界が変

質していった。そして、この主であつたおっさんの術式を一斉に組み直す。記憶継承しているので、言ってみれば全てのセキュリティのプログラムの内容やらパスワード全て知っているようなものだ。

そう、ここは最早俺の巢同然で、あの二人は異物同然なのだ。

「ハッ！ さあさあイリユージョンの始まりですよ？！ 演目の名前は題して『ミラーハウス』！ この迷宮から抜けられるかなああああああ！？」

先は見えている。絶望だ。彼にとっての殺し合いでも何でもない『遊び』が始まった。

先の見えたゲームなど面白くもなんともない。結果だけ言おう。ありふれた最後だ。逃げられるわけが無かった。簡単に言ってしまう出口を自由自在に動かせる迷路の中に迷い込んだのだから逃げられるわけがない。捕まった二人は魔術の試験運用に使われた。

一人は風の魔術を如何に精密に操れるかの実験。魔術事態の破壊力は低いが見えない凶器となりうるこの無詠唱呪文の哀れな被験者となった。結論、使える。指一本触れずに皮膚だけを剥がしたり、表面上傷を付けずに骨だけ断ち切ったりすることが出来た。最終的には全身の皮膚を反転させてショック死を起こしてしまった。死亡。

もう一人は治療魔術の実験。どれほどまでなら死なないか、そのモニタリングの被験者となった。これはある意味もつとも使える。様々な用途に用いることが出来る。

結果は切断面を縫合無しでも魔力量次第では完治可能。ただし重症になればなるほど、具体的にいうとグチャグチャになればなるほど費やす魔力は大きくなる。流石に身体を開いてそのまま治療しようとしたがそのままでは対して意味が無い。内臓を分離したり、はみ出した状態で治療してもやはり大差なく、とりあえず傷口がふさがり止血は出来ることぐらいだ。ショック死を避けるためにやってみたが、痛覚を魔術によって誤魔化したりもできるようだ。当然だが、死者の蘇生は不可能だった。

結論死ななきや結構魔力量次第で何とかなる。死なないだけならキチンと手当してから使用すると“治療”という目的ならかなりの効果がある。まあ治せるものなら自然治癒がもつとも無難なことが明らかになった。

燃費悪すぎ。魔力がたまたま多かったからいいものの、普通の魔術師なら腕一本繋げるので一杯一杯になるだろう。これ全部やるだけで魔力の四分の一を消費した位だ。

と自分でも異常なことやってんなと思いつながら眉ひとつ動かさず確認作業を終えた。いずれはやってみなければいけなかったことである。オーヴァンの得意とする四つの系統の内の風の魔術、結界術、生体魔術の確認を終えた。もうひとつは召還魔術であるが、これは召還においては触媒を用意することが基本であるため検証はしなかった。まず使わないだろう。

自分がこれから何をするかなんて決まってる。まずはこの帝国から離れなければいけない。一応隠遁はするつもりだが、何が原因で追手がかかるかもわからん。下手にこの国に留まるべきではないだろう。

故に国外に出来る限り自然に出た方が余計な厄介事にあわずに済む。ゆえにそれに適した職業があるらしい。“傭兵ギルド”と言われるソレは要は荒事に長けた何でも屋だ。護衛、戦争、魔物の駆除なんでもござれだ。そこに所属して商団の護衛でも受けて脱出、そんなプランだ。

勿論少しおっさんの伝手も使わせてもらっけど。

金銭も多少は持つていく。魔道具は役に立つ物だけ持つて行った方がいいだろう。無駄に注目されそうだが。後はどっかで売っ払う貴金属を少々それでいい。あんまり持つていても意味がないし。

使いなれているナイフ大中小3本と暗器、それに手入れの道具を残骸から引つ張り出す。それと小道具を少し。これでいい。あとは要らない荷物になるだけだ。

さあ、行くか。

もう一度床を踏みしめて、出口へ向かって歩き出す。ぐらぐらとこの工房という名の大魔術師の城が崩壊の予兆をみせ始める。背後の残骸が彼が通った後に燃え始め、赤い炎の熱と煙が広間の空間を圧迫し始める。

「しかし、本当に人生ってヤツはおもしれえ。ほんと、何が起るかわかんねえ」

そうして歩き出す殺人鬼。彼にこれから何が起きるかはわからない。だが――

「まずは帝都とかいうトコに行ってみるか。とりあえずだが、新しい門出に乾杯しねえとな」

——決して碌な事にはならないだろう。それは確かである。

その姿は彼を取り囲む魔法陣の中から消え失せた。

「くぞお〜、なんてこった！ 前衛に被害出過ぎ！ ぶっちや  
け何コレひどい、やってらんねえ〜！！」

帝都・レイザのある傭兵詰め所。帝都に一時的に滞在する傭兵団にギルドが提供する社宅のようなものである。ギルド多大な貢献をした星持ちの傭兵団にだけ貸し出されるため、それなりに設備は整っており広い。

ここに滞在している傭兵団は『火砲』と呼ばれ、三つ星、二つ星、一つ星のランカーの中でも一つ星を冠する一流傭兵団である。

多くの魔術師適正のある人員を抱え、人員数は中規模ながらも機動力と火力を兼ね備えている部隊と評価されている。

そしてごく最近行われたデュニオス帝国との戦争において依頼を受けて戦線に加わった。戦争自体は目々戦ではあったが相当の戦果を挙げ、その持ち前の機動力を生かして見事に依頼内容の後方攪乱を成功させ帝国の正規軍の撤退を助けた。

しかし、流石に無傷とはいかなかったようだ。

そして、その広い家屋の執務室では山のような書類を前に頭を抱え込んで唸る女性の姿があった。赤毛のポニーテールを振り立てる。「いたい、いたい」と聞こえる声からして、頭痛がしてくる程の深刻らしい。

「アルたいちよー、団長が・・・」

そこにどこか気弱そうな、これまた赤毛のしかし顔つきの良く似た女性が部屋にやってくる。髪型がショートで、その、ちよつとだけ、比較的スレンダーなところが違う。

「ああー…わかってる、わかってるから、ネル。早く書類を纏めてさっさといくから。お姉ちゃん今、被害報告をまとめているから出来たらすぐに…。」

「いや、何かそのことですぐに話があるらしいよ？」

少し苛立ち気味に返事をした姉に妹は残酷な事実を告げた。団長からの呼び出し。それは確実に何か厄介事で…。それを理解した姉はがっくりとうなだれる。そんな姉を見て気の毒そうな顔をする妹。そう、するだけである

「聞かなかったことにしてもいい？」

「だゝめ」

凄い笑顔で尋ねる。もういいよね？ そう言いたげである。そんな現実から逃げ始めた姉に優しく諭してやった。無駄だと。

「…行つてきまゝす」

「行つてら」

がつくりと先程よりも肩を落とす姉を見送りながら、副隊長の妹の務めとして隣の机で自分の仕事に取り掛かるのだった。

いつ姉の嘆きの叫びが聞こえるだろうかなんてことを思いながら。

——そこはある一つのものの以外は何もない空間。白色だけで構成された空間。どこまでも続いているかのような錯覚を起こしそうになるほどに白一色。扉もなければ窓もない。閉鎖されているかのよ

うな空間。

ここがどこかも分からない。ここが何なのかも分からない。

だが、ここに存在するもの・・・ある一人の「人間」は此処をこ  
う呼ぶことにしていた。

### 【虚無】

そこに存在する人物は口を開く。ここ数百年ぶりに口を開いた。  
新たに観測した事象が見逃せない重要な要素であつたから。待ち望  
んでいた。その声帯を静かに震わせた。

「——ようやくか。長い、長い時を待った。ようやく全てが  
揃った……」

その人物は女とも男性とも外見上は捉えられる。まるで水に浮かぶようにして宙に胎児のように浮かんでいる。彼、または彼女はその瞼を閉じたまま薄く笑った。感極まったように。

それは正に全てを祝福するような女神のようであり、全てを嘲笑うかのような悪魔のようでもあった。そんな矛盾した印象を受けるような笑顔であった。

そして、白色の空間の中央にはゆらゆらと浮かぶ画面のようなモノに異界からの流入者の姿が写されていた。尋常ならざるほど残酷で、しかし異常なまでに合理的で、しかし確実に異端なる精神を持つ化け物。映し出された映像は普通なら目を覆うどころか、嘔吐すらしかなないほど凄惨な光景だ。

しかし、それを見ながら慈しみの、憎しみの、相反する感情を浮かべた微笑みを浮かべた。

「計画始動だ。それとおかえり、……ずっと待っていたよ、君が来るのを」

物語は、動き出した——ゆっくり、ゆっくりと。刻ときを刻み始めた。止まっていた時間を取り戻すかのように、ゆっくりと……。

「第一段階、『生誕』完了。これより第二段階に移行……」

全てが動き出したのだ。

### 3（後書き）

何でだろう、俺はレポートやってたはずなのに・・・いつの間にか小説書いてた。

感想頂けると非常に嬉しいです。今死にかけてる作者の原動力なので（笑）。



「そう・・・素晴らしいわ。本当にイイ子ねえ。ええ、フフ」

「？」

「フフフフフフフツ。本当に立派な子よ。流石は殺人鬼<sup>わたしたち</sup>の子  
……早く育たないかしら。あのヒトは息子と早く殺り合いたいらしいし、ジュルリ……」

「？ 変なかあさん。ねえ、遊びに行ってもいい？」

「あらあら、今まですっかり遊<sup>あそ</sup>んでたでしょうに……。まあいいわ。いつてもいいわよ」

「わーいーい！！ 祥平とこに遊びに行ってくる！ いつてきまーす！ー！」

タタタタタタ・・・

「・・・フフフ、本当にすばらしいわねえ。ああ、我慢我慢！ それにしてもあんにも躊躇<sup>ためら</sup>わなかったわねえ、あの子。初めての殺しに恐怖も昂揚も快感も何も感じてない。—— 何て“殺人鬼

”。思わず背筋がゾクツときたわね。なるほど『人間』じゃあないわね、既に。……それにしても、ああ、なんて、なんて——おいしそうなのかしら。今すぐ殺したいわあ。早く育たないかしらね”

それを、部屋の外で少年は聞いていた。

この世界の傭兵ギルドというのは、各地の戦線における補完要素の需要を満たす軍事サービスを行う組織だ。各地にギルド支部が置かれ、数多の傭兵団の活動や仕事の調整、依頼者の要望を満たすための各種のサービス、支援活動、情報統制などが主な業務だ。

そして傭兵団への大口の依頼者である国からの大規模な仕事としては警備や輸送警護、魔物の間引き、威力偵察などが主に依頼される。その各地に引かれているラインから来る軽いネットワークを生かして依頼の達成が可能な傭兵たちへと仕事割り振られていく。

この世界、アマルディア大陸は古くから争いの絶えない世界だった。それなりに平和だった世界はかつての突如現れた魔王と魔物の

侵略によって崩壊し、それまでの世界のシステムはほとんど半壊した。だが、人間は目の前の脅威を乗り越えるためにその手を結び力を結集した。数多の各国の歴戦の勇士と勇壮な兵が世界の敵を討つためだけに向けられたのだ。そして見事に討ち果たし、世界は歓喜の渦に包まれた。そしてようやく世界は平和を取り戻した——かに見えた。

魔王を倒すために一致団結したまではよかった。だが、魔王討伐後暫くしてから始まった覇権を巡る戦争。魔王が没した後も増殖を続ける魔物。そしてそれから五百年どこも魔物、そして少ない利用可能な資源を国益のために各国が虎視眈々と互いの隙を狙っている。各国の小競り合いは絶えない。正規の軍だけではとても手が回りきらない。そんな状況下で生まれた社会システムである。

以上が俺が取り込んだこの世界の大まかな歴史と傭兵システム誕生の推移である。なんともまあ、良く飽きないものだ。そう思う。

こんな感想を抱けるのは本当の意味で俺が第三者であるからだろ  
うがな。

酒をぐいっと呷る。質の悪さが際立つ。うえ、まじい。生温いビ

ールのようなものが入っていたジョッキを苦々しく眺める。まあ、こんなところじゃそんなに良いものがある訳がない。だが、正直なところ元の世界の缶ビールの方がずっとうまいな。まあ酒には強くても、全然飲まなかったが。

「……ねえ。あんた、本当に何もしないのかい？」

「ああ」

ブスには興味ねえんだ。わりいな。

流石にその言葉は酒と共に飲み込んでから、得物の手入れを続ける。物心ついた時から握らされていたものだ。普段から手入れは怠っていないためにこれは最早習慣だ。そして自分の命を全面的に預けることになる相棒でもある。言葉は交わせなくても俺を誰よりも長い時間コイツは見てきた。そして一番多くの血を吸ってきた凶器だ。

「あんた売春宿（うりしゆく）に何しにきたんだい？」

「ああ？ 見てわかんねえのか？」

そして女は俺の手元の得物と整備道具を見て溜息をついた。厄介な客だ。そう言いたげである。まあ金は料金の二倍は払ってるから何も言えないようだが。

その女性は外見は三十路近くで毛先がボロボロの金髪で、身体のラインも崩れ気味の女。一人だけ暇そうにしていた所に声をかけられたのだ。それなりのチップを払って一夜を共に過ごすこととなったのだが……。

いつもはそんな客なんていないのだろう。女は何も仕事がなくて手持無沙汰そうにしている。そして何か知らないが、俺の座っているテーブルの対面の椅子に腰かけて、酒を飲んでいやがる。

「おい、俺のだぞ。いや別に良いんだがな？　こんなクソ不味いもん。だがせめて酌ぐらいはしろ、ボケ。常識的によお」

「売春宿（売）に来て女そっちのけで得物磨いてるガキに常識説かれてもねえ」

元々の呆れ顔を更に呆れさせながらも、ジョッキに酒を追加する。ああ、不味い。冷えていりや大分マシになりそうだがな。

「はあ……私は何をすりゃいいのか……あんたみたいな客は初めてだよ」

「ああ、じゃあそこで適当に踊ってる。少しは酒で出っ張った腹が引き締まるだろうよ」

「何だって！ こ、こいつ。ガキの癖にっ！」

憤慨するクソを無視して相棒の具合を満足気に見やる。問題なし。いつでもどこでも掻っ切れる。  
女がジッと睨みつけている気がする、が気のせいだろう。ああ、そうだろう。

そこで女はふうと改めて溜息について酒を煽った。

「まあいいや。金が貰えて、クソまずいけどお酒も飲めるなら別に損はないしね」

「人から奢ってもらってる酒を不味いとかいうんじゃないよ。本当にクソ不味い酒だな」

「ハッ！ こんな肥溜めのような場所にあるモンに期待なんかするんじゃないよ。泥を啜って生きてる餓鬼共がそこから何時の間にかくたばっていく、こんな所にさ。ここは捨てられたモンが集まる場所なんだよ……ゴミもモノも、人もね」

「何せ最下層だもんな、モノが下に堕ちていくのは道理だろおが。それに此処だけの話じゃねえだろ」

「はは、それもそうだ。こんな場所、今の世の中じゃどこにでもあるよ。この国だけの話じゃない」

どこか自嘲するかのような垂れ気味の瞳が、部屋を照らしたす灯火の光に揺れる。どうしようもない、そんな諦めの念が如実に感じ取れた。

しんみりとした空気が流れる。互いに酒を呷った。俺も案外落っこたされたのかもな。悪党には悪党らしい死に様が必ず拝めるに違いないねえ・・・この血で血を洗う世界によお。

思わず笑みを浮かべてしまった。

——俺にとっては楽園だな。

前の世界ははっきり言って俺には合わない所だった。もっとも人殺しが日常茶飯事の此処でも俺は十分に外れた異常者だろうが、前

よりはマシに見えるだろう。悪党の俺にとってはこの空気は馴染みやすい。

まあ不満があるとすればここは畜生が多すぎる 것인가。今日この貧民街を歩くだけで何人殺したくなったことか。勿論騒ぎにはならないように自制したが。やはり二流の畜生ほど不愉快で迷惑なものはない。

そんな空気の中、女は俺の空いた器に酒を注いだ。夜は更けていく。

「で、どうよ？ 初対面の俺が言うのも何だが、最近の景気は」

「ふん。まあ少しは懷が暖かいかもね……。どっかの気前のいい客がそれなりに恵んでくれたんでね」

「ぎやはは！ そいつはツイてるなあ！ こんな所でこんな女にそんなにくれてやるアホがいるとはな。どっかの国の貴族サマの袖の下にでも通しておけばいいのによお。あっという間にエラうくしてくれんぜ」

「そうそう。そしてさっさと人を食い物にして欲のまま生きて、自分もさっさと喰われちまえばいいのさ。ククッ、もっと大きな力を持った犬畜生いぬちうせいにねえ。ここはそういう食物連鎖うきんが出来ちまってんの

さ。この世界はそうやってうまく廻ってる」

「ははは！ まったくだ！ それでよお、まあ、もしもだ。多少はまともなヤツが政に就いたするぜ？ そしたら少しはこの満目荒涼の世界を何とかしようとすんだろつよ。だがよお」

「そう、そして愚かな畜生共に殺されていくのさ。あるいは腐っていく。上はみゝんな真っ黒さ。数だけが多いからね」

ゲラゲラと汚い笑い声をあげながら不味い酒を俺達は呷る。

「クソならクソなりに生きていかなきゃ魂まで腐っちまう。ここは“樂園”なんだぜ？ シケた顔した自称不幸共にはわかんねえ話なんだろつがな」

「そりゃそうだ。私たちはまだ心と魂だけは捨ててないからこそ、まだ“踏み止まっていられる”のさ。クズはクズでも犬畜生ではないさ」

「ああ、そうだな。“メラン・コリー”」

沈黙が部屋を支配する。まるでここだけが音を失ってしまったか  
のようである。隣の部屋から薄い壁を通して断続的に聞こえていた  
男女の嬌声は途絶えた。…いや、“遮断されていた”

ジッと互いを見つめる。そして同時に杯を逆さにして、空気を入  
れ替えた。

女の雰囲気は一変した。まるで獰猛な肉食獣のような雰囲気を纏  
い、不敵な笑みを浮かべている。頬杖をついて、とんとんととテ  
ーブルを指で叩きながら天井に目をやってから、俺に視線を戻した。

その表情は実に面白いと言いたげな笑みが浮かんでいる。

「どのくらいかけた？ 私を探すのに」

「一か月くらいかあ？　それまでは色々、とな。忙しかったんでね」

「知ってるよ。サツキ、だろ？　単独で傭兵ギルドのDランク試験を合格しやがった糞餓鬼<sup>ルーキー</sup>つて。…ま、あんたはそれよりも裏での顔の方が知れてるけどな。ちつ、最近ドタバタしすぎて知らない内に尻尾みせちまったかねえ」

この世界に来てから約三か月。その時間を俺は断片的だった情報の補完作業と自分の足場固め、そして俺自身のコネを作ることに費やした。傭兵ギルドはおっさんのコネを利用して最短でランク試験を受けられるよう融通して貰い、仕事の優先度や要求が通りやすいようにした。そして裏で出来るだけの横のつながりを作ることに腐心した。

元々同じような世界で生きていたので要領は分かっていた。顔覚えのために至るところを廻りまくってそれぞれの親元に顔だしをしていたりしていた。急速に足場固めを行ったためにかなり不審に思われたり、潰しに掛かれたりすることもあったが、俺は馴れきった作業を死なない程度に繰り返していると、その内襲撃は止んだ。

元の世界では横のつながりを持ち、多くの後ろ盾<sup>スポンサー</sup>を俺は持っていた。それだけ俺の業は希少価値と実用価値の高いものだとは証明し続けたためである。最高の殺し屋がいればそれ以外の殺し屋は全く意味を成さないからだ。——最高の技術を一身に継いだ殺人鬼は最

アドバイザー  
高の助言者にもなったのだ。

だが、この世界では、まだ後ろ盾は俺についていない。故に闇雲に動いても無駄だ。俺の存在がこの国に知られているかどうかはわからないが少なくとも追手は差し向けられてはいないことは分かっている。懸念していた危険性は下がったが、それでも俺自身の足場が不安定であることには変わらない。他へ移るにしてもそれなりに地盤を築いておかないといざという時に不味い。

様子見の結果、どうやら泳がされているというわけでもなさそうだと判断し、当初の即逃亡という予定を変更した。焦らず確りと準備を終えてから、このきな臭い情勢が感じられる帝国から離れることにしたのだ。

そうして俺の目の前にいるのは『姿の見えない魔女』という二つ名で呼ばれる頭領<sup>ヘッド</sup>メラン・コリーである。この帝国、現在戦争状態のデュニオス帝国、傭兵ギルドの本部も置かれている中立国やゴスの三ヶ国に渡ってその手は広がっており規模がでかい大組織だ。

そして頭領のメラン・コリー自体は二百年生きているとか噂があったり、いや実は代替わりして入れ替わっているなど情報が錯綜している。だが、共通なのはだれも本当の顔を知らないことだ。顔を見せる時にはいつも顔を布で覆っていたりしているので誰もその下の素顔を知らない。

「――何をして欲しい？　ぼうや？　このメラン・コリーに」

「――情報と俺に今必要なもの、分かるだろ？　あとよお、その汚ねえ顔被<sup>つ</sup>るのやめろ。腐臭<sup>くさな</sup>がすんだよ」

「ははっ！　そこまで見破られてるとはね。この稼業を今までやってきて初めてかもねえ。しかし、今回のコレは今までで最高の出来だったんだが」

女は顔の皮を引つ掴み、思い切り剥がした。皮膚の下にあった肉ごと剥がれていく。そしてその下から先程まで被っていたものとは似ても似つかぬ素顔が晒された。

――長い睫毛、短く切りそろえたショート黒髪。褐色の肌に鼻筋もスツと通っていて美しい。だが、その活発そうな印象を受ける風体は発せられるどこか妖艶な雰囲気<sup>まじり</sup>が混ざり合い正に雌豹のようである。

べちゃりとその手に持つ本物の肉と皮で出来た覆面をテーブルにおいた。服の下の詰め物もボトリと床に落ちる。互いにそんなことは気にせずに会話を続けた。

「ふん、思っていたよりずっと若いなオイ。何代目だ。」

「六代目よ。うゝん、出来は良かったはずなんだけどな。鮮度も良かったし。生きたままの状態そのものだったんだけど……まあいいや。それにしてもあんた肝が据わってるわね。余裕こいてていいの？ 普通こういうのは知ってはならないこととかいって口封じを恐れるものだけど」

「確かに。“俺”を本当に殺せるんならな」

「なあゝに？ あなた、自分は絶対に殺されせないとかそういう幻想持つてるの？ 言っとくけど……」

「いいや？ 俺でも死ぬ時は死ぬだろうさ。それにお前が俺を潰しに来る可能性はかなり高いだろうよ。だがなあ……それはそれで構わねえ。——全部解らすだけだしな」

何でも無いことのように言っただが、相対するメラン・コリーは内心で冷や汗をかいていた。サツキの眼には何の驕りも緊張も無かった。それまで通り何も変わらない黒い瞳だった。それは明らかな異常を示した。この男は間違いなく本気で言っている。それも根拠の無い自信からとかではなく、確実に実行可能である“想定内”であると。まるで午後のティータイムに茶菓子がついてきたような、そんな大したことでもない違いなのだと。

——なるほど、コイツは異常だ。

先代からの生体魔術の技術の粋を受け継いだ自分と同じように。

だが、こいつは同じ異常者の中でも異質……<sup>くもつてお</sup>。そう相対して改めて確信をした。そして兼ねてから考えていた、あることを実行することにした。

「まあいいや。あんた面白いからね。初めてメラン・コリーに辿りついたものとして許容してやるよ。色々と面倒くさいことになりそうだしね、……敵対すると」

「ハッ！　ありがとうございますー。めらん・こりーさまー」

「……。まあいい。いいよ。アンタが望んでいるのは私に後ろ盾になって欲しい、そうだろ？　ある条件を飲むんならなってやってもいいよ」

実にあっさりと何でも無いことのように言い放った内容に今度はサツキが内心驚く番だった。自分の行動の意図に気付くものがあるとは思っていたが、ここまで早く簡単に見通せるのか。もう少しかかるとは思っていたが。

そんな内心を見抜いたかのように説明を続ける。

「そりゃ気付くヤツは気付くさ。ここ最近にこの街に突然現れたアントハはこの“裏”にやたらと顔を出した。最初はただの死にたがりのアホだと思ってたけどね。

ここのまとめ役達に顔を見せて帰る。それをあんたは繰り返した。だが、次第に連中は恐怖を覚え始めた——そりゃあ気味が悪いよね。現れるのは決まって、誰にも知られる筈のない会合場所を突きとめて現れるんだから、ね。何度場所を入れ替えても、どれだけ万全を期しても、あんたはいつの間にか自分たちの背後に立っているんだから」

酒を艶やかに飲み干す。それはほんとうに面白いことを話すようだった。

「そいつらは警告し、そしてソレをあつさり無視しやがったあんたを潰しにかかった。ここの“裏”総出でだよ？ それをあんたは何でも無いように全部逆に潰しやがった。それも単独で、だ。今じゃあんたに手を出すようなアホは裏に通じてるヤツなら絶対いないだろうさ。

……実質半年であんたはここ“裏”の一つになった。その身一つで。アレは証明だった。私からしたら本当に分かりやすかったよ。あんたの持つて一番の価値が良くわかった。ここの連中を相手取った最高の血と肉湧き踊るお披露目会。デモンストレーション傍から見てる分には面白いショーだったよ。楽しませてくれる男だと思ってはいたさ」

俺達は同じように相手を見てニヤリと口の端を吊り上げた。

「——私もお前にいつか接触しようと思っていたのさ。実の所。率直に言う、あんたのその腕を買いたい」

願ってもいない。互いに思ったことは話が早いということだったのだ。口の端が自然と互いに吊りあがる。

「いいぜ。無料ただでその手に関するアドバイザーことの助言者にはなってやる。何かあってもあんたの傘下に手は出すことは正当防衛以外にはしない。それは確約だ。まあ表向きは接触はしない方向でいこうや」

「ふゝん。・・・表向きは傭兵そうちでやっていくつもり、か。ま、そりゃそうだ。浴びる泥は少ない方がいい。例えそれが人の命を金に変える職でも、少なくともまるつきりコツこつちに浸かるよりはマシだろうな」

「当たり前だ、少なくとも此処では合法的な職業だからな。だれが好き好んでこれ以上身をやつすかよ。殺しが別に好きってわけじゃないしな。殺すのは俺自身にそれなりの理由がある時だけだ」

これはあえて言った。俺は別に快樂殺人者ではないのだ。これを明言しておくことで危険視される恐れを必要以上にしないようにするのが目的である。

それにこれまでの俺自身の殺しはあくまでも正当防衛がほとんどだ。殺した数が多すぎてあまりアテにはならないが。まあ全体の数は依頼が絡んだ殺したが、依頼料自体がかなり法外なものだった。その代わりにまず実行不可能の難易度の類のものがほとんどである。それに俺自身に直接繋ぎを持てる人物なんて正に先に言った後ろ盾の中でも限られていた。

まあ、あえて俺の情報を流して適度におびき寄せたりはしていたが。下手に完全に隠遁なんかしたら俺に繋ぎをとれる彼等に迷惑がかかるし。

「……まあ、どうしてもって頼みがある時は俺個人に依頼って形で頼むぜ。もちろん非法<sup>ひふ</sup>法<sup>ぽう</sup>法<sup>ぽう</sup>でな。その代わりかなりたけえぞ？ 初回だけは半額サービスにしてやるが」

「ふふん気前がいいね。そういう奴は結構好きだよ。——それじゃこちらからも先行投資をしてやるよ」

そう言つてメラン・コリーは再び覆面を被る。何事かつぶやくと、だるんだるんの肉がきゅつと自然に引きしまった。そうして言葉を発する。「これは最近耳に入ってきたんだがね」と。

「近々おつきなことがこの国で、いや多分この街で起こるよ？ 私  
は丁度この街から出ていくつもりだったから差し迫り身の危険はないんだけど。——気いっけな。今まさに動いてるよ。デカいデ

力い戦が始まる。これまでの小競り合いなんか目じゃないような…  
…地獄がね」

何度もそんなのを見てきたけど。そう続けてから彼女は席から立ち上がって出口に向かって歩き出した。

「じゃあね。また会えることを祈ってるよ」

「はっ！ そっちこそ」

そうしてパタリと扉は閉まる。それを俺は残った不味い酒を一気に呷りながら見送った。

……でかいことねえ。

さてさてどうなることやら。

燃え盛る炎の中、多くの死体が横たわる。熱い熱い業火は何もかも灰塵としていくだろう。

此処にある思い出も何もかも燃やしつくして浄化する。これまで此処に生きてきた人間の痕跡を無に帰すことが何よりも手っ取り早い。あまりにも哀れにすぎる。これが俺達に出来る最後の手向けだった。

横たわる亡骸の内の何人かは顔見知りも多くいた。

柿ピー。高校の同級生の悪友だ。いつもニカニカと笑って俺の後ろについてきた幼なじみは絶望の表情のまま絶命している。その隣には千切れたワイヤーによって上下に分断された彼女の彼女の姿もあった。二人とも俺が殺した。——僅かな喪失感を感じた以外は何も感じない。

ふと横目に映る燃え盛る家屋を見やる。

この奥で埋もれているだろう人型の炭の中に、いつも昼時に雑談を交わしながら飯を食っていたうどん屋のおやじが転がっているだろう。俺を子供の頃から知っていた彼もまた俺が殺した。

彼が振りかぶった包丁を潜り抜けて、一瞬のうちに喉に突き刺した箸のせいで苦しんで苦しみ抜いた末に死んだことだろう。

昔からのよしみで早く楽にしてやりたかったが、横から邪魔が入って仕方なく、漏出させたガスに引火させて邪魔者共ごとまとめて焼き殺した。——僅かな喪失感しか感じない。

その他にもいくつも、いくつも転がっている。

髪が伸びる度に散髪にいった床屋の主人。暇な時間を立ち読みして過ごしている時に横からしゃしゃり出て追い出そうとする生真面目な本屋のアルバイト。高校の同級生たち。もう言いだせば切りがない。

みーんな俺がこの手で殺して炎の中につっこんだ。——何かそれまで後生大事に持っていた物をゴミ箱に捨てた、その“程度の喪失感しか、感じなかった。

全ての後始末ともいえる光景を見納めて、俺達は互いに向き合った。

俺の目の前にいるのは美しい女性だ。猫のようにくりくりした瞳、活発そうな短髪、小柄ながらも均整のとれた肢体。——それら全てが血に塗れてる。

彼女のことは誰よりも知っている。そして、彼女は誰よりも俺のことを知っている。隣の家に住む幼なじみであつたというだけではない関係だつた

俺達は互いを理解できる故に、互いを愛し、そして憎んだ……というより憐れんだ。どうして、おまえが、と。おまえがソレなんだと。幼き過去に互いの境遇を初めて知つた。

ギラギラと鋭い刃を向け合う。命を奪う。たつたそれだけのために研ぎ澄まされた短刀が、互いの心臓に狙いをつけるかのように切っ先を向け合った。その刃は互いの肉親の血を吸って怪しく炎に照らされる。

そして彼女——檜山理恵は場違いなまでに楽しげな笑みを俺に

向けた。

「ねえ、相棒」

「なんだ、相棒？」

「誰がこんなエンディングが待っているなんて思っただろうね。こ  
んなの、陳腐なTVドラマの中だけかと思ってたよ」

「そうだな。正直、お前とだけは、殺しあいなんてしなくなかった。  
俺はお前のことを心の底から愛してる」

「フフ、仲間として？ それとも……一人の“女”として？」

「どっちともに決まってるさ。お前はかけがえの無い俺の相棒で、  
俺の女だ」

「……うれしい。ありがとう、相棒、ううん………サツちゃん。  
君に会えて本当に良かった。」

——でも、だからこそ優しい時間はここまでなの。  
私たちは生まれも育ちも普通とはかけ離れた生き方をしてきた。私  
たちはお互いが大事であるからこそ殺し合う必要が、あるんだ。何  
もかも違う私たちに共通する信条。

——『約束』

ソレを貫く必要がある」

「ああ、そうだな……」

『絶対に死なない。最後まで足掻きぬく』

それは絶対におかしてはならぬ『約束』。ただの幼なじみでしか無かった俺達が、互いをようやく正しく理解した瞬間に、交わした『約束』

本当はお互いに独り残すような真似をしないように、絶対に生きて帰ってくる。ただそれだけを誓うためのものだったのに。希望を生むための優しい『約束』、だったはずなのに。今は絶望しか生まないものである。

あの時、まさかこんな結末を迎えなんて思わなかった。

「他者の命を簡単に奪える私たちだからこそ分かることがある。意味の無い死なんてものは迎えたくない。何より、あなたを一人になんてしたくなかった！ あんな地獄にあなたを独り残して死ぬなんて、出来なかった」

「俺達は互いに互いを尊重できるからこそ、本当の意味で、命のやりとりをしなくてはいけない……。でも、俺たちはようやく、ようやく“出口”まで来れた。やっと解放される。今まで求めて求

めて、心の底から渴望してきた自由が待っている」

「……まあ正確には、まだ出口の門の前までだけだね。そしてその門の下を通れるのは、たった一人だけ……。神サマは誰もが救われる幸福なハッピーエンドなんてくれなかったのね……」。

確かに私たちの望みは叶う。この先に確かに“自由”は待っているだろうね。

だけど、それを比翼と共に手にすることは出来ない。共に手にしたいと願ったからこそ、ここまで全てを捨て去って、泥にまみれながら駆け抜けてきたというのに。願いの成就と必然の絶望。これまでの所業と生。ソレ相応の結末——“TRUE END”。

それしかないのよ、こんな殺人鬼の外道に相応しい結末以外はね」

俺と彼女……いや、集落の住民の全ては知らない間に『首輪』を付けられていた。その『首輪』とは陳腐な爆弾だ。心臓の真上に取りつけられたその爆弾は一度起動したら脈拍を制限時間として爆発する、そんなものだ。

そしてその解除条件は二つ提示された。

“集落の住民”は俺達二人の心臓の鼓動を止めれば助かる。

“俺達二人”は自分以外の者全ての心臓の鼓動を止めれば助かる。

《運営》<sup>ディラー</sup>——俺達の両親たち——曰く、『本物を選別する儀式』だったらしいが、まあいい。

そんなイカレた狂人共の戯言など全くもって理解の外にある。それは、どうでもいいのだ。

これにより意思の有無に関係なくデスゲームを繰り広げた。そして俺達二人は当然互いに手を組み、俺達以外の全員を殺して

いた。

ディーラー

そして運営も全員殺した。希望を捨てずに、あの人外染みた狂人どもとすら事を構えた。

人格はともかく、その血に塗れた業の頂点に立つ狂人達。その殺し合いをようやくの思いで制した。

だが、その結果分かったことは、本当に解除条件はどちらかの死しかないという真実だった。

最も《運営》の期待通りに育ったらしい、“殺人鬼”としての才能溢れるらしい俺ら二人。

だからこそ、俺達は互いを求めた。そして本当の解放を求めて、初めて情性ではなく自分の意思で人を容赦なく殺していった。……生きるために。

ハッピーエンド

——だが、だが俺達にとっての本当の勝利なんて無かったようだ。例え死したとしても《運営》の思惑通り……選別は滞りなく行われる。

俺達は互いに愛し合ったからこそ、どちらかを犠牲にしなければいけない。

最高の殺人鬼とは誰なのか？

そんな結論を得るだけのこの一連の悪夢に終止符を打たねばならない。生き残るためには。

互いに決めた信条のために己の命を捨てることはできない、そんな重たいだけの重しを互いに相手に預けたくなかった。

それに、自分が死ぬとしたらコイツのためになら殺されてもいいと思ったのは、二人とも同じだった。どうせ殺されるなら、コイツ

に殺されたい。そう二人とも思っているのだ。

「いくよ?」

「おお、……こいよ」

互いに、一歩踏み出す。そしてその影が交錯した。そして、互いが互いを解放するためにその刃を突き出した。

無駄な駆け引きなどいらない。これは、ただどちらが最後まで殺人鬼の精神を保ち続けられるかの“選別の儀”でしかない。互いに尊敬できる唯一の理解者であったからこそ、最後まで貫ける方に命を預けよう。そうすれば、きっと己の預けた“命”を永く有効に使ってくれるだろうから。

「——……サツちゃん。君にならこの命あげられるよ」

何よりも美しいと思える微笑。

そして気付く。ああ、良かった。彼女は違った。俺は淡く微笑んだ。良かった、彼女は違ったんだと確信できた。

「——リツちゃん。君はやっぱり、違ったんだ」

彼女は、涙を流していた。

そう、彼女は人間だった。この人でなしの俺と違ってまだ正常に1の世界を生きている人間だった。

そう、悪魔ってのは泣かないんだ。この1の世界から半分は外れている1・5の存在が俺だった。

心とは裏腹に、本当にいつも通りに動いた手。突き立てた刃が心臓を抉る。噴き出したその鮮血が頬を伝った。その感触を感じても愛していた人をこの手で殺したというのに。

全てが終わったというに、全てを終わらせたというのに。俺は、一滴も涙を流さなかった。哀愁はある、胸を引き裂かれたかのような悲しみもある。それなのに、俺は……躊躇いが無かったのだ。だが、それは——どこまでも残酷を示している。

やっぱりそうだったんだ。静かに笑った。

俺はようやく長年心を悩ませていたことに決着をつけられた。悟った。そうか、この世に生を受けたその時から、違ってたのか。

——俺は正常なままに狂っていた真人間だったんだ。

なんて、ひどい。

そうして日々を過ごす。やっとしがらみから解放された日々を精一杯生きた。

そう、確りと受け取ったのなら、その分生きるしかない。俺達の間で交わした絶対順守の『約束』

後悔はない。だが、ただただ物足りない。

——そうして得られた“自由”は、それまで想像していたものではない。籠の中の鳥として閉じ込められていた間は気付かなかった。そう、自由な空に飛び出してから気付いた。

そう本当に味方が自分“しか”いないなら外には敵しかいない。何もかもこの手で壊してしまったのだから、いるはずもない。半身である比翼すらも失って、そうまでして得た物。その答え。

——“自由”で広い空。それは確かに真実。だが、其処はあまりにも、独りで飛ぶには広すぎる——

朝焼けの陽光がそつと窓のカーテンの隙間から薄暗い室内へと一条の光となって零れ落ちる。

その光が一人の男の伏している寝台の上へと滑りこんだ時、彼はゆっくりと意識を覚醒させた。

最悪で、ただどかけがえのない夢を見た気がする。内容は良く覚えてはいないが。

「・・・朝か」

そう呟いて身体を起こしてから、がりがりと頭を掻きながら枕の下に隠してあったナイフを手にとって懐へと入れた。室内に存在す

るのは彼が手早く服を着替え、かちやかちやと武装していく音だけ。それらの作業が終わり、スツと視線を横にずらして陽光の漏れる窓の外を眺める。習慣として自然に外から見えない角度に身体を寄せながら周囲の様子を確認した。

向かいの建物の置物や部屋の雰囲気までサツと一望して、昨日までと変化があった所、無かった所を把握する。……大丈夫だな。そう安全確認を終えると、一夜を過ごした部屋から出て行った。

「今日も楽しい一日の始まりだ」

そう呟く彼の表情はいつも身につけている百面相という『仮面』を取り外した、全くの無表情であった。

——ただただ、満たされない

ギシギシと音がなりそうな過ぎ去った年月の多さを物語るようなボロくさい階段の下にある受付口には、これまたくたびれたような風体の中年の男が退屈そうに頼杖をついて座っていた。現在彼以外にはまともな客のいないスラムの宿の店主である。

一見居眠りしているようにさえ見えたが、きつちりと客が出てきたことに気付いていたようだ。

それまで眠たげに閉じていた瞼を開けるとぎょろりとその瞳をこ

ちらへと向けた。

「おはようさん……仕事かい？」

「ああ、ちよつとな？ 悪いな、こんな時間に起こしてよ」

「はは、気になさんな。これも仕事さ」

余計な無駄口を省いて、頬づえをついているテーブルの前に今日と明日の宿代を置いた。此処は利用する諸施設との距離も程々で、何よりも有事の際の逃走経路の多さに目を付けて昨日試しに泊つてみた場所だった。感想としては中々に良い宿だった。隠れ宿の候補として頭の中の名簿にその名は記載された。

店主はそれらの硬貨を一枚一枚数えると、ゆっくりと頷いた。

「まいど」

その声を背にサツキはくたびれた宿からギルドへと向かう。今日はギルド職員に呼び出されているのだ。厄介事の臭いがプンプンするが、呼ばれたのなら行かなくてはならない。所詮は雇われの身なのだから。

そうして彼の姿は街の雑踏へと消えていった。

その後ろ姿を見送る店主は、ほおと溜息をついた。この男は、こんな所に宿を構えているだけあって荒事にも慣れている。そしてその道の人間も他の者よりも多く見てきた。この街の裏には耳聡い。

……それだけにわかる。

あの何も写さないガラス玉のような黒い虚無の瞳。

一瞬見せた何も感情を感じさせない鉄面皮。

そして一切の足音すら立てない隙の無さ。

——おお、怖え、怖え

ありやあ、絶対に敵に回しちゃあ駄目だ。

そんな長年の勘が囁く通りに彼は業務をこなす。長いモノに巻かれて生き残ってきた男は強者に敏感なのだ。

それだけにあの若者は恐ろしい。正直今まで顔を合わせてきたどんな極悪人共よりも、背中を奔る寒気の性質が悪い。成程、裏にその存在が浸透する訳だ。あれに命狙われたら諦めるしかねえな。

昨日の時点で告げられた退室時刻の早さに文句を言おうとしていたのだが、そんな気はあの顔を見たらすぐに失せた。あまりにもニコニコと笑顔を浮かべていた好青年といった昨日の印象とは違っていた——いや、猫を被っていたのだと気付いたからだ。

正直あの一瞬あそこが血の海に染まったのかと錯覚する位にむせ返る血の臭いを彼から感じた。そしてこちらに気付いた一瞬で、その臭いを霧散させた。

それが何よりも恐ろしい。非日常と日常、そのどちらにも完璧に順応してみせていた。彼はどこにも、どんな場所にも容易に溶け込むだろう。そして、笑顔でその背に隠した刃を振りきることのできる人間だ。そして誰も彼を疑わないのだ。彼にそんなことが出来る

訳が無い、と。

くわばらくわばら

とりあえず、あの若者がいる時に揉め事が此処で起こらないことを祈ることしかできなかった。

「——はあ……あなたはまだ、単独で続ける気なんですか？ 初めに私に忠告されて一体どれくらい経ちましたかねえ？ 馬鹿ですか？ そうですか？」

「おい、勝手に決め付けんな」

「いやはやまだ死んでないのが奇跡ですよ」

そう丁寧な口調ながらも、こちらを<sup>バカに</sup>心配している年若い女性。彼女が俺の担当となったギルドの事務員のシャーテである。美人だ。一見キャリアウーマンのような落ち着いた仕事人という感じの印象

を受ける彼女であるが、それなりに付き合いが長くなるにつれ彼女がどんな人間なのかわかる。一言でいって慇懃無礼。まあ根は素直で情の深い女である。

まあ俺はまだ新米らしい彼女が担当した初めての傭兵らしいだから、危なっかしくて目につくだけだろうが。今月の打ち合わせに、俺の依頼斡旋担当の彼女の元を訪れてそんな会話をしていた。

「大体わたしが何回あなたに『死ぬ前に誰かと組め』と言ったと思いますか？ この仕事を舐めてるバカならさつさと死んでくれて結構なのですが、あなたは真正銘の腕利きです。まだ新米の私にとってあなたに死なれるといういろいろ困ります」

「ん〜？ 心配してくれんのか？」

「そりやしますよ？ 何せあなたは私の担当している中でも有望株ですからね。新人で、しかも単独でこんなに早くランカーに辿りついたなんて、このギルド支部に赴任して日が浅い私ですが聞いたことが無いですよ」

「……暫くはこのままの方がいい」

「そりやあ強制なんてしませんよ。でも生き残る確率は多少なりとも上がりますよ、絶対に！ いくらコミュ障気味でもちよつとは見込みあるでしょ？ 顔は良いんだし。ホイホイ釣れそうじゃないで

すか。そうでなくても腕が良いんだからちよつと交渉でもすればあつという間ですよ、あなたなら。それで使えそうな人を選別して組んでみたらいいじゃないですか。使えないならポイしたらいいだけの話です」

「コミユ障言うな、違うから。それと、何だ、そんな性根の腐った駄目男！ そんなことはしねえよ！

……はあ、そのたつた“一回”で足引つ張られて死にかけるのは御免だぞ。俺はな？ “ただ腕っ節が強い”っていうだけの脳筋とは組む気は無い。そんなの探せばどこにでもいる。俺は“仕事が出る”人間を探してんだよ。俺が求めるのは戦闘力じゃない。遂行力だ。」

「……まあ、ぶつちやつけそうですね……。でもそういう有能な人は大抵どこかの傭兵団に所属してますからね。あなたはそういう既存の団体に所属する気はないんでしょう？ これまで色んなところから勧誘されても全部蹴ってますからね」

「事情があんだよ。大人の事情ってやつが」

そう明らかに面倒くさそうに答えた。その姿を見てシャーテは溜息をついた。その態度でありありとわかったのだ。この男は面倒くさがり屋で気分屋な所がある。それでいて非常に有能であるから始末が悪い。今更どこかに所属しても、うまくやっていけないことを自覚しているのだ。

「はあ……分かりましたよ。もう！ 私の言うことなんて全然聞きやしないんだから」

俺の言葉に何か言いたげに眉をしかめると不機嫌そうになる。……まあそれもそうだろう。

聞いた所によると彼女らの収入は普段こなしている事務仕事等は基本固定給だが、彼等が斡旋した依頼を傭兵がこなせば依頼金の中から手数料として彼女等<sup>リターン</sup>に支払われることにもなっているらしい。故に彼女ら斡旋人からして仕事をこなせる人員、中でも高額な仕事をこなせるような腕利きの傭兵は自分たちの食い扶持。ましてやそれがどこかの傭兵団と規模がでくなり、大口の依頼をこなせるようになれば必然的に彼女達への配当も跳ね上がる。そんなwin-winの間柄であるのだ。

仕事を確実にこなせる優秀な人間にはそれなりの金払いの良い仕事を優先して斡旋してくれる。彼等の担当する傭兵たちが生き残って依頼を達成できるかどうか、難易度とその報酬<sup>リターン</sup>を天秤にかけて。その判断の精確さが両者にとっての死活問題となるのだ。

傭兵たちも自分の力量にあった仕事を選んでくれる優秀な斡旋人であればあるほどそのサポートがあれば、確実に生き残り高額の配当を手にすることが出来る。正に切っても切れない関係。

彼女の中では俺は“当たり前”の仕事仲間だ。だからこそ死んで欲しくない。

俺としても彼女の斡旋してくれる仕事はいつもリスクとリターンが絶妙なものばかりで、優秀な斡旋人だと理解している。少なくとも無駄に死地へと送り出す人間ではないからこの関係は維持したい。

まあ存外お人よしな彼女だ。そういう損得の打算とは別に今の俺の状況が気に食わないというのだろう。だから会う度に俺にこうやっていい加減に誰かと組んでみる、と苦言を呈しているのだ。

「まあ大丈夫だ。別に一匹狼を気取るつもりはねえよ。今は実績を積むことを優先してるってだけだ」

深々と疲れたような溜息をつく彼女に俺は悪いと思いながらもそう答えるしかないのだ。

彼女が考えてることは分かる。それから組織作りするにしてもそう簡単にいくわけがない、と。

何しろそういう組織を作るってことは企業を起こすこととほぼ同意。気まぐれやノリ、思いつきで無計画にやってもうまく立ち行く訳が無い。

資金の確保、事務所や取引先との提携、他の傭兵団との関係の調整、経営云々などやらなければいけないことはたくさんある。それだけ計画性と準備を要するものなのだ。

だが、ハードウェアの準備自体は実は終わっている。これまで各所へ何度も顔出しをしていた上に、支援をしてくれることを約束してある。拠点も確保してあるし、事務所や訓練所も備品も確保してある。後は人材だけなのだ。

俺の作るうとしていることは、フットワークの軽い少数精鋭部隊。それによる護衛、あるいは“攻性”の殲滅のプロフェッショナル、そしてそういう人員の育成をする団体組織。それを起業することが今の目標というべきか。そう前の世界でやっていた仕事をここでもやろうとしているだけである。

そのためにはそういうことに向いてる、または才能のある人材探

しが必要な訳だ。そしてそういう少数の任務の達成実績が“表”向きに必要。俺は表も裏も関係なしに、そういう人員育成と少数向きの任務を専門にするつもりだ。大規模な腕利き傭兵団はあっても少数の腕利きは少ないから需要はあるだろう。今は将来に向けての実績積みの段階。どこかの営業サラリーマンのように足で稼いでいる最中というわけなのである。

だからこれだけは真剣に告げておこう。そういう傭兵稼業の組織を起こしたら俺の担当である彼女がそのまま傭兵団へのギルドを通した依頼の斡旋担当になる可能性が非常に高い。

「——大丈夫だ。別に無計画に動いてるわけじゃねえよ。ちゃんと目的があつてしてることだ。今は危険を冒さないといけない時。ただそれだけだ。」

「……はあ、それなら良いですよ。何考えてるのか知らないですけど、所詮裏方の私から言えることは、死んだらそれでおしまいってことだけです。必ず生きて帰ってきてくださいな。それだけは徹底してくださいよ？ あなたは私の初めて担当した人なんですから死なれると目覚めが悪いんです」

「当然だ。死んで得る栄光なんかよりも生きて得る安寧と自由。俺はそういう男さ」

その俺の言葉を聞いて安心したのか、軽く笑顔を浮かべた。それでいい。元から美人なのだから笑顔を浮かべて小言をよこさなければ

ば良い目の保養になる。

そんなことを考えていたら突然、ざわざわとギルドの中が騒がしくなった。

「何だ？」

「さあ？」

そう首を傾げていると、奥から事務担当の職員が出てきてシャーテに話しかける。

「……！ すまん、シャーテ直ぐ来てくれるか？ 緊急で依頼が入った……！」

「……分かった。今行く！ 悪いけどサツキはここで待ってて！」

もしかしたら「仕事」かもしれないよ？ そう目が言っていた。

「おう」

そう言っただけで慌ただしく部屋から飛び出していく彼女の姿を見送りながら少し冷めた茶を啜った。

「何か知らないが、厄介事の臭いがプンプンしやがるぞ……」

そんな、御馴染の「感覚」をひしひしと覚えながら嫌々ながらも武器を磨くのだった。いつでも動けるように。準備出来るなら出来る内にしてこそプロだろう。

この嫌な予感が外れたことはこれまで一度もないのだから……。

## 断話 1

この世界について、少し語ろう。あくまでも常識の範囲内として周知の事実の歴史。

まず説明しておく、この世界の人間ははつきりいつて、かなり「詰んでいる」状態と言っている。

「魔物」と聞けば、大体の現代人は慣れ親しんだRPGの感覚から言つて、まるで害虫駆逐の対象として思い浮かべるかもしれない。まあ間違つてはいない。少なくとも人間の生活圏からは排除が優先される生き物だ。だが、その現実結構シビアな世界だ。もう圧倒的に肉体が脆弱な人間が不利だ。

向こうの世界で良くやっていたゲームで例えてみれば分かりやすいと思う。

簡単に言えばホラーゲームに出てくるような怪物を駆除すると思つてくれ。それもプレイヤーの事情なんか無視して理不尽にゲームバランスが変動していくものだ。そしてその難易度には上限など存在しない。

ようするにだ。普通に凶暴な上理不尽なまでに神出鬼没。いつの間にかやってきて人に襲いかかるのだ。魔法がある？ そんなもん唱える前に殺されちゃったら意味がないのだ。というより魔法はこいつらに対抗するように発展していったという歴史を辿っていた。すなわち人類難易度ベリーハードの世界だと思つてくれ。人と魔物は今まさに生態系の頂点を巡った生存競争の真つ最中だ。（だからこそ、その魔物を「単独」で相手取ることが如何に異常であり、驚くべきことであり、バカなことなのか分かる）

そもそも人間が『生息』できているのはこの大陸しかないというのが一般の認識だ。その大陸でさえ半分は魔物に侵食されている。いや違う。ようやく半分は押し返したといえればいいか。

……そもそもなんでそんな化け物が溢れているかと言えば、この魔物という生き物、恐ろしいことにただの残照に過ぎないらしい。そもそもこの『魔物』とはそれなりに複雑な背景がある。

そう、始めは静かな、しかし突然のものだった。

この世界の人類が最も栄えた時代……いくなれば数百年前の崩壊する以前の世界。その世界で発達した魔道力学が生んだ新エネルギー。ソレがほんの些細な取り違いと災害が重なった偶然の不幸で生み出してしまった悪魔。それが始まりの魔物の始祖らしい。

それまでとは革新的な有機物無機物関係なく宿るエネルギーとして発見された……『生命力』。

ソレを非常に効率よく捕食する怪物。それらは事故に巻き込まれた様々な動物を融合・捕食することを可能にした。そして自己複製と増殖、変異、淘汰、進化していく。数万年かけるべき進化を数年で終えた奴らは新たな生態系を一瞬で構築した。

勿論人間とて手ぐすね引いていた訳ではなく、人間という生き物に宿る可能性を発掘し続けた。

そして終には己に宿る生命力を自在に操る術すら開発された。ただ一つの単体でしかない人間が、数多の森羅万象を操る技術、数多の生命を操る技術、とてつもなく肉体を頑強にする技術、次元や空間すら歪曲する技術。……この世界の人類が俺の居た世界の科学の代わりか、飛躍的な発展を遂げていた魔道力学の恩恵が生み出した

『魔法』である。

そして、もうひとつの武器。それは発現するのは極少数であるが希少かつ不可思議な理論では説明できない異能の力、それは《神からの贈り物<sup>ギフト</sup>》と呼ばれた。

これらはあるという間に増えていく奴らに対抗する人間の力。その認識は間違っていないかった。

かつては総数十億人の人類に対して奴らの総数は有象無象の大小含めて推定約一億。全ては駆逐出来ずとも人類が新たに手にしたその力は再び人類に栄光を齎す、筈だった。何せ奴らの増殖率は異常ではあったが、所詮は知能を持たない獣。効率的且つ大量破壊を可能にするそれらの力があればそれは十分可能だった。

だが、奴らの進化速度はあまりにも……全ての予想を越えていたのだ。

——吸収した有象無象の怪物はいつしか“知性”を得ていた。そう神の贈り物は我々人類だけでなく平等にクリスマスのサンタクロースのように知らない内に配られていた。いや、違う。悟るべきだったのだ。

……そう、何故そうと決めつけたのだ？

——そう、人間は絶対に吸収されないなどと誰が言ったのだ？

奴らの中に数多の、それこそ人間が人間のために配布した因子すら取りこんだ新たな人類が現れ始めた。

始めの事故、その後の騒乱、怪物の侵食から逃れられなかった人間、新たな力をもつてしても数の差に及ばなかった人間達。

それらの集大成を始祖の悪魔が結集し人間をベースにした生き物

を生み出した。高度な知能と頑強な肉体、超常の力を持つ新たな『  
新人類』。――通称、『魔族』。それが、誤算だったのだ。

とうてい人間では及ばないほどに次元が違う生き物だった。

そうして世界は喰われていくことになる。絶望が世界を覆っていた。

だが、そこで救世主が現れる。絶望に打ちひしがれる人間に規格外が誕生した。魔族を打倒した女傑。それに応じるように各地にもぼつぼつと希望は生まれ始めた。その次元の差を覆せるだけの《神の贈り物》<sup>ギフト</sup>を持つ希望の灯火。その頂点に立つ彼女はそれらの数多の英雄をまとめ上げ、決戦を仕掛ける。

多くの魔族を打ち倒し、多くの英傑の命が失われた英雄譚が続く。そしてその歴代の人間の中でも最強と謳われた者達によつて、ついに新たな怪物を生みだす始祖の悪魔を打ち倒すことに成功する。それが最後まで生き残った英雄である彼女の残した最後の偉業。そして、始祖と相討った彼女は永き眠りについた。

ここまでが今の時点で分かっている詳細な歴史だ。ここまでが俺が知ったこの世界の詳細の歴史。これらが記されていた書物はどれも最後は人間の勝利であるとして綴っていた。

しかし本当に人は勝利したのだろうか？

その結果は今を見ればわかるだろう。

多くの魔族を殺し、多くの《ギフト》を持った人間は死に絶えた。そう今では本当に数える程しか《ギフト》を発現した人間は存在

しない。

魔道の技術は向上しても、まるで神から見捨てられたかのように……人から失われていった。  
だが、それでも人間は戦える人間を戦場へ送り出す。少しでも滅亡の未来を回避せんとして。

弾力性の高い戦力として運用が可能な傭兵制度。魔物を拒む空間を生みだす結界魔術。対処法や戦術の確立。様々な発展を日進月歩に人類は遂げてきた。

そう、懸念すべきことは

——多くの魔族は確かに殺された。だが、しかし……全滅したわけではなかった。そのことである。

今では魔族の姿を見て生き残っている人間は数少ない。だが確かなことは

——人類の天敵『魔族』は今だ健在であること——

これが何を意味するのか。

果たして今の人類で対抗できるのか？ それは例え答えを知っていたとしても、誰も口に出来ない事実きょうふであった。

片やほぼ全ての最高戦力を摩耗しつくして敵の中核であり製造者を打倒したものの、中々立ち直れない程の傷を負ったもの。

片や多くの同類を殺されたものの不確定多数の有力戦力が残存し、何よりも確固とした生態系を確立していたもの。

さてさて……、先の大戦の本当の勝者は一体誰なのだろうか？  
それは迎えるべき終焉を迎えるまでは、誰にもわからない。

夜の帳がある集団を静かに包み隠していた。

そこにあつたのは密かにライアス帝国内へと侵入したディニアス帝国の一軍の野営地である。

それは彼等の忠節を誓う帝国にとっては千遇一隅の好機だった。敵対する帝国の大幹部である大魔術師オーヴァンが離反し、デュニオスへ内応していた彼の手引きにより彼等は警戒網の穴を潜り抜けることに成功。精鋭を集めて編成された軍隊ならではの統制のとれた神速の進軍が可能にした。

そして彼等に与えられた任務は『首都への強襲』。彼等の動きに応じ、もうすぐ敵の目を引く仕掛けが作動する。それは魔道大国・ライアス帝国の国防を担う魔物の侵入を防ぐ《結界》の限定解除。帝国の首都を中央にして、広大な領土を守護するために敷かれた、四方を囲む正方形形状に結界の頂点の一つに仕掛けをしたとのこと。普通は専門の結界術者が何十人がかりで行う大それたことを、個人で行うことの出来るというオーヴァンの力の強大さが分かるだろう。そして、その結界解除の混乱に乗じて首都へと強襲をかけるという

電撃戦である。

そして、その計画はここまで何の問題もなく完璧に進行していた。

——そして、いよいよ明日が予定された決行予定日。

だが、先程までは決戦に意気込む人の営みが確かに存在したその宿営地は今、静けさに包まれていた。もう既に床にいたのであるうか？

……いや違った。

「ぎゃああああアアアアア——ッ！！！！！！」

耳をつんざくような絶叫と、びしゃりとバケツの水を引つ繰り返したような水音。

近くにあったテントは、生温か赤い染色剤によって過剰に塗装された。どさりと重力に従って何かが崩れ落ちる。ガラガラと機材が散らばった。

——そこは惨状。むせ返るような血の臭いが辺りを漂い、グチャグチャにひき肉にされた肉塊がポツポツとその辺に転がっている。掲げられたかがり火は全て消え失せ、その光景を映し出すのは淡い月明かりだけ。

「う……嘘だ……嘘よ、こんなの……」

そうして最後に残されたのは女性士官。たった一人だった。彼女は今でも自身の置かれた状況を理解できないでいた。いや、あまりのことに現実を受け止めることを拒絶していた。

何が起きた？　と右を見やる。何本もへし折れた木々の先にあつたのは副官として付き従ひ恋仲だった、隊長の変わり果てた姿。その近くにはこの部隊で一番の腕利きの兵士が風穴をあけられて死んでいる。そして左には自分と親しかった女性士官が胴体と下半身が泣き別れして苦悶の表情を浮かべながら絶命している。知り得う人物たちの死体が散らばる。

辺りを見渡せば、その視界に映るのは、見渡す限りの死体死体死  
 体死体死体死体死体死体死体死体死体死体死体死体死体死  
 体死体死体死体死体死体死体死体死体死体死体死体死体死  
 体死体死体死体死体死体死体死体死体死体死体死体死体死  
 体死体死体死体死……——今この瞬間を持つて、デュニオスの精  
 鋭であつた部隊は彼女を除いて全滅した。

そして自分の正面に眼をやれば、月の光に照らされているのは年若い少女の姿があつた。月の柔らかな光に照らされるのは真つ赤な絹のような艶を伴つた髪。肩にかかるように横へ紐でまとめたサイドテールの少女の姿はまるで天使のように美しかった。そのキラキラと光る紅い瞳はこちらをじつと見つめている。

ぴちや、  
ぴちや

赤い雫が彼女の透き通るような指を伝って地面へと滴り落ちる。

——それはこの少女こそがこの惨状を引き起こした実行犯であることを示していた。

そして少女はこちらへと静かに歩を進めて近づいてくる。

（逃げなければ！！）

そう心の中では思っているのに、完全に腰が砕けて動けない。だ

が同時に本能で理解していることもあった。——例え逃げ出そうとしても、背を向けた瞬間に殺される、と。  
すつと手を上げる。

思わず悲鳴を上げて両手を頭を護るようにして抱え込んだ。

——殺されるっ!!!

そう思っただけで目を瞑った彼女の頬に手を当てて、すつとその顔を上げさせた。

「——へえ、良い顔してるわね。その恐怖と絶望に染まりきり、それでいて諦めきれない生を掴むための奇跡が起こることを望む弱者の眼……先程までは戦う者として申し分の無い眼をした強者が恐怖によって弱者に成り下がる。一時の余興としては、良いわね」

まんじりと、その顔を舐めるように眺めると満足気に頷く。

「いいわ。あなたみたいな“人間”は本当はあまり趣味じゃないんだけど……ちょうど、駒が欲しかったのよねー。さてさて、あなたの名前を覚えていただけるかしら？ すいーとれでい？ ちなみに私の名前はフィリスっていうの。よろしくね？」

嗜虐的な笑みを浮かべる少女の、頬に添えられた手に殺気が僅かに籠る。ただそれだけで怯え、勝手に口が動き出す。

「わ、私の名前は、エ、エリー・マクスレムです……っ！」

「そう、エリーね。思ったよりも良い名前ね。それであなたの所属は？好きなものは？恋人はいるの？」

意図の読めない質問。だが、そんなことを考えている余裕はない。この少女がその気になれば辺りに転がっている仲間と同じ末路を辿るのだから。

「所属は！ デュニオス帝国陸戦第27中隊所属で、好きなものはアップルパイで、恋人は、さ、さつきそこで……っ！ ううっっ！」

「あらあら……泣いちゃだめよ？ かわいい顔が台無し」

あまりの恐怖に、まるで幼子のようにポロポロと涙を零す。もうだめだ。殺される。私もそこで転がっている隊長のように首を素手でねじ切られて殺されるのだろうか……。そんな思いが恐怖と言う名の鎖で私の思考を縛りつける。

困ったように笑う少女はどこから取り出したのか、白いハンカチで私の涙を拭った。

「戦闘能力は人間基準で考えればそこそこ、魔術適正もあり。それに先程までの戦いを見た感じだと、この娘はどちらかといえば指揮官向きのようね。……うん、大体こんな感じかな？ さてさてエ

リーちゃん？」

「は、はい！！」

「ふふ、そんな怯えないで。大丈夫よー？ もう怖いことはしないわ。約束するから。さて、最後まで生き残ったあなたにはご褒美として私から良いお話があるの！ 聞いてくれるよね？」

こくこくと頷く私を見て彼女は満足気に微笑んだ。

「うんうん、イイ子イイ子。……さあ、今から二つの選択肢を与える。しっかり考えて答えてね？」

1、あなたの命を助けてあげる。でもその代わり、私の手となり足となって働いてもらう。

そうね、期限は私があなたに飽きるまで、かしらね。アナタはそれまで永遠に私の奴隷として働くハメになるわ。その代わりといっては何だけど、あなたはその期間の間は絶対に死なないし、年も取らないようにしてあげる。言ってみれば私の奴隷でいる間は不老長寿ってやつよ。この約束は絶対を守るって誓うわ。

2、ここで恋人を追って死ぬ。……ふふつ、そんな怖がらないでよ。大丈夫、恐怖も何も感じる暇もなく一瞬で楽にしてあげるから。それに、ある意味一番楽な選択かもしれないわよ？ 1を選んだとしても私がいつ飽きるかわからないのだから。それなら今ここで全てから解放されるのも間違いじゃないわ。恐怖も悲しみからも解放されるの。さて、あなたはどちらを、取る？」

何て不条理。どちらも絶対にまともなものじゃない。これは生き

地獄か、何も無い死かを選ぶということだろう。だが、だが……  
周囲に横たわる元同僚たちの姿を見た。本当に死は救いなのか？  
違う、違う！！ あんな無惨な……あんなものは救いなんかじゃない！！  
どんなに無様でも、私は——！！ 選ぶ選択肢はこれしかなかった。

「——1で、お願いします。私は、私はっ！ まだ死にたくないっ！！！！ 生きていたいんです！！」

「……フフ、少しはマシな顔になったじゃない。その方が断然、私の好みよ？ 死んでもいない癖に、絶望する軟弱者なんて生かす価値なんてないからね。良いでしょう。これで契約成立ね？——光栄に思いなさいな？ 末席とはいえ、この私の“人形”<sup>コレクション</sup>の一つになれるんだから！！」

「があ！！？」

そうして私の胸に突き刺さる腕。その腕を思わず掴み、「約束が違う！」と罵ろうとした瞬間、少女は微笑んだ。

「心配しないで。言ったでしょう？ 約束は守る、わ」

そうして身体が光って、粒子状に拡散したかと少女の持つ大きな本の中へと飲み込まれていった。

そうして開かれた本の白紙の1ページにその粒子が集まったかと思つと

『エリー・マクスレム』

と名前と顔写真、彼女の出生や生涯の概要が記述されていく。そうして次は詳細なデータが次から次へと記述されていく。その様子を満足気に彼女は見やつた。

だが、頭上の三日月を見上げて溜息をついた。その表情は憂鬱そうである。

「……さあて、準備は整つた。愚かな人間の演出した三流劇。それに少しだけ手を加えましょう。私がするのは気まぐれなほんのちよつとのいたずら程度のもの。そうちよつと選別出来るように場を整えるだけ。ただそれだけなのけど。——でも、もしかして“今の”人間にはこれでも過剰演出になるのかしら？

……まあ、いいわ。今のつまらない人間の国の一つや二つ滅んでも。『停滞は退屈』だもの。私の愛する“本当に強い人間”を見つけるためにはしょうがない。ああ、数百年前のような強き者たちはもういないのかしら。鮮烈な魂を持つものはもういないのかしら。全員死に絶えてしまったのかしら。ああ、哀しいわ。退屈で死んでしまいそう」

——生き残つた魔族の中でも序列が存在する。そして中でも天蓋の能力を有する上位十位の中の“序列七位”を冠する『傀儡のフイリス』。

彼女の気まぐれな行動は運命を更に加速させていくのであった。

——そうして、ライアスの帝国の結界の一角が崩壊したという  
報せが本国へと届くまで時間はかからなかった。

森林に囲まれた小高い小山。

その頂上の見渡しの良い開けた場所にフィリスは腰かけ、果物を頬張りながら、遠所に存在する城塞をその並外れた視力でもって観察していた。

シャクシャクという音を立てながら、美味なる甘味に齧り付く。

——— 少しでも高い丘の上に存在し、その眼下には開けた平野が城塞の門から先に広がり、平野の敵が隠れる場所などない。

そして備えられた兵器は魔力を込められた砲弾を使う魔力砲台や駆けあがつて近づいてくるであろう敵を寄せ付けない特火点<sup>トーチカ</sup>や堡壘が機能的に備えられている。そして、何層もの砦が存在し簡単には突破できないようにしてあった。

ふむ、これに加えて多種類の結界魔法まで使用しているというのだから、その防衛能力は折り紙付きだろう。

標準的な防衛構築だが、それは配備されている兵器・人員が高水準な証でもある。これほど防備の充実した軍事施設を建設するとは流石、今の疲弊した人間の中でも大国と言われているだけはある。

ふと喉の渴きを覚えておもむろに酒を取り出す。この間寄った人間の国で購入したワインだ。それを飲み干し、想像以上の味わいに破顔する。

その笑顔はその美少女然りの容姿に相応しい天真爛漫そのものである。

「ん〜？ これ美味しい！！ 今度から彙員にしようかしら」

彼女は魔族であるが外見は人間と変わらないので、よく観光気分  
で出入りしているのである。

そうしてニコニコと微笑みながら思う。

これだから人間は面白く、侮れなく、そして愛すべき生き物なの  
だと。 こうやって飲み慣れていると思っていたものでさえも、日  
進月歩で変化していく。 彼女はその停滞を嫌う性格からか、常に  
止まらない生き物である『人間』がたまらなく好きだった。

思わず眉を顰めてしまうような愚かさを見せたかと思えば、眩い  
までの美しい面も持ち合わせている。

あまりの冷酷さと残酷さを発揮する同族殺しが大好きな人間もい  
たかと思えば、情に溢れ、心踊る愛を交わし合う人間もいる。

そんな宝石の原石のように、カットや見る角度次第で如何様にも  
移り変わる不思議な生き物。

おっと、いけないいけない。

変な方向に逸れていく思考をずれた黒のシルクハットと一緒に修  
正しながら、結論を出す。

「う〜む。 一応今回のコレ“お仕事”でもあるからなあ〜……………で  
も、私の目的に沿うためには少し手加減しないといけないし…………。  
ううむ、匙加減が難しいぞ」

そう今回、彼女はある依頼を引き受けていた。

それは序列の高い魔族へと通達された仕事。

魔族の中でも実力者と謳われたものたちに優先的に回された仕事の内容は“現在の人間側の戦力確認”というものだった。

といつても頭の痛いことに序列の上位に位置する魔族達は、こういつては何だが色物が多い。

殺戮が大好きな者もいれば、侵略・征服が大好きなものや戦闘狂、かといえば天体の観測のために飲まず食わずで空を眺めているものや研究狂い、芸術の道を極めんと構想を得るために危険な生物がうじゃうじゃしている密林に単身飛び込んだりする者など十人十色である。

勿論まともな者もいるが（といつてもやはり一般的に見て変わり者）、そういう者は総じて多忙であり、このようなことに時間を割く暇などない。

……他国とのにらみ合いや今を生き残ることに必死な人間たちに比べて何と自由なことだろうか。

まあ彼等の共通点は皆が皆自分だけはまともだと思っていることと、“規格外”であるということころ位だろう。

そして依頼の性質上、彼等の中でも理性的で、常識の比較的ある人物にこの仕事は回される。

そしてフィリスがこの仕事を受けた理由の大半は“退屈しのぎ”だった。

そもそも彼女自身魔族の中でも、蒐集癖のあるコレクターで各地を放浪し、“人間”が大好きな魔族であるとして、仲間内でも変わり種とされている人物だった。

各地を放浪している彼女と運よく接触できた魔族の者も、一応……

…といった感じでこの仕事を依頼したのである（彼女は興味の無いことには一切関心を払わないということでは有名だった）。

だが、彼女は彼女自身が探していたいくつかの物品や生き物の“情報”と（「物品そのものでなくてよろしいので？」と確認した魔族の者に、彼女は自らの“蒐集家”としての心意気を一晩熱く語った。曰く「欲しいものを自分自身の手で手に入れるまでの過程と努力と苦労が重要！！」らしい）、この仕事の裁量を自分に全て一任するという条件で快諾した。

目当てにしていた品が手に入って、その時の彼女は上機嫌だったのだ。

……まあ今ではその勢いそのまま依頼を受けたことを若干後悔していたが。

といっても、めんどくさがって手を抜くということとはしない。彼女には“己が納得して結んだ約束や契約は守る”という己のルールがあった。

まあ願わくば、彼女の眼に叶うような人物が頭角を現してくれたらうれしいとは思ってはいたが。

「そろそろ時間かな？」

そしてイソイソと白いスカートの上に広げた甘味を片づけて、地面へ降り立つ。

彼女の得た、今さっき確認したあの強固な防御結界が消失するという情報。

これは格好の実態調査の機会である。———そう、お仕事の時間だ。

そうして溜息をつきながら手の内に現れたのは、魔道書のような  
図鑑のように大きな黒い本。

ファニースロット  
『蒐集目録』

それが彼女の発現した《ギフト》である。彼女の蒐集癖に応える  
かのように発現し、その象徴として具現化された魔道書。

彼女の蒐集した物品を登録・保存する。簡単に言ってしまうとそ  
んなところだ。

機能の一つとして、魔道書に保存したものを本人の意思で自由に  
出し入れの出来るという機能を持っている。

そしてこの本の中には、彼女がこの数百年の間に蒐集したあらゆる  
貴重な物品や生物が保管されていた。そのラインナップは国宝と  
されるような強力な武器、美術品、果てはもう絶滅したといわれる  
生物や、かつて伝説と謳われた竜、あるいは彼女のお気に入りデ  
ザートなどなど節操なく登録されている。

この能力は一見ただの便利な能力にしか見えないが、その実際の  
姿は凶悪極まりない。

何事か呟く。それは人類には理解できない言語によって紡がれる  
呪文。

「—— k d u t g w b i , j f o a k u …… そうだね。この辺に  
生息している魔物中心で行こうか。」

グリース ワイバーン 狂熊500匹、翼竜1000匹、それと手を加えて食人鬼と死体  
人形をそれぞれ2000匹、そして城壁破壊用に土の魔人 オーガ マッド・ゴーレム を…… 1

「5体かな？」

そうして魔力光と共に魔道書から次々と黒い泥のようなものが吐き出されていく。

そして泥の中からまるでタマゴの殻を破るかのようにして生まれてくるのは魔物。

——その生誕を喜ぶかのように産声の雄叫びを次々とあげる。

全身を筋肉で覆われた巨体の狂熊。

その鉄を用意にかみ砕く牙と翼を持つ翼竜。

鬼のような形相を歓喜に包んで、男性の胴と同じ位の太さの両腕を掲げる食人鬼。

柔らかい肉を求めて口から涎を滴らせながら腐臭を漂わせる死体人形。

そして体長十メートル以上の、全身が岩で出来た巨大な魔人、土の魔人。

……それぞれがそれぞれの生誕を喜ぶかのように雄叫びが轟いていく。

彼女は白兵戦能力も高いが、基本的には典型的な魔術師タイプである。

だからであろうか？ この魔道書は一度蒐集したモノなら、本来召還魔術に必須であるはずの触媒などを必要とせずに発動することを可能にするという能力を有していた。

——そして彼女は、どんなに優れた召還術師でも5体も召還すれば息切れを起こす召還魔法で、千単位もの数、しかも多種類に渡る生き物を同時に召還してケロリとしている『規格外』だった。本気をだせば万単位でも余裕だと語る彼女は、魔族の中でも最強の召還魔術師であると謳われている。

……もつとも、彼女の本領はそんなところではないのだが。

あらかたの泥を吐きだし終えてフィリスは満足気に見渡した。そこに広がるは壮観な魔物の軍勢。かつての『女傑』達、人間の英雄達との心踊る戦を思い出した。

だが、あの時と違うのは心踊る運命の大決戦ではなく、これはあくまでただの仕組まれた演劇であるということか。

そうであるならば、そんな人形劇にはクルクルと踊る『人形』の存在が必要不可欠だ。

ニヤリと笑ったフィリスはそれまで開いていた『魔物』というカテゴリのページから——『人間』のカテゴリ分けされたページを開いた。そして、あるページで手を止め、先程とは違った呪文を詠唱する。

——そして、溢れた泥から現れたのは先日、この図鑑へと取りこまれた人間。

「……さあて、『エリー』？　あなたがこの戦の主役の一人。  
直庵に五人『死神騎士』キラーナイトも付けてあげるわ。……さあ頑張つて

？　あなたが私を満足させたなら或いは……ね。わかるでしょう？  
総指揮官様？」

につこりと己に微笑みかける主人へと彼女——エリーは恭しく  
頭を下げてその命令を受理した。

「……承知しました」

瞳を絶望に染めながらも、自分の矮小な力では彼女へ逆らうことは許されない。……そもそも自分の今の肉を構成している魔力を供給しているのはこの魔族なのだから。

——取り分け人間を気に入っている彼女は、当然のごとく人間も蒐集していた。そしてそれは特別枠として完全に他の生物とは扱いが異なっていた。

彼女は、己の好む人間に対してこれまで幾度となく接触してきた。

ある時は力を貸す盟友として、ある時は憎むべき宿敵として、ある時は助言者として、ある時は育ての親として、ある時は油断ならないライバルとして。

……そうやって幾度となく相手によって関係を変えて接してきた。  
——その人間に最も成長を促す人物として。

『尊ぶべき人間』の一生を傍でずっと見届ける、あるいは支えることこそが、彼女にとって最も楽しく悦楽を覚えることなのである。

彼女曰く“ 眼の前で溜息の出るような美しい宝が出来上がっていくその過程こそ、長い生涯を過ごしていく中で何よりも心が踊る瞬間”らしい。

そして、気に入った人間がその天寿を全うした時に、彼等を魂ごと保存し、彼等への自らの“愛”も永久のものとする。

その総数は現在6人——彼等との絆、記憶、その全てが彼女にとつては宝なのだ。

単なる種族ではなく、それぞれを忘れてはならない一個の存在としてその本の中に保管している。魔道を極め、完全に不老となつた生き物だからこそ残せる“絆”。彼等は人としての生涯を終えても彼女と共にあるのだ。

……だが、それとは別に宝ではなく、単なる「駒」として保存している人間もいる。エリー・マクスレムはその一人だ。

彼等は魂ごと牢獄に閉じ込められた、いわば奴隷。必要な時に出して、使つて、再び仕舞う。

——いわば、道具だ。そして自らの本体が本の中にあるために反乱をおこすことも出来ない。あくまで本からでている時の身体はフィリスの魔力によって構成されている分身にすぎない。

……本当の所、別に『人間』自体が特段好きな訳ではないのだ。もちろん気に入つてはいるが、それはあくまでお気に入りであるというだけ。

すなわち、彼女にとっての宝たちが『人間』だったというだけの話だった。

だからこそ、それ以外には殊更に冷酷になる。

「……さあ、始めましょう？」

飢え、欲、憎しみ、救済、愛……人が奮い立つ要素などいくらでもある。でもね？ 訪れる苦難を、理不尽を……——運命を覆す。その圧倒的な力があなたたちにはあるはず。どんな種族、生き物よりも優れているその力が、ね」

彼女の手がゆっくりと振り上げられ

「人間の最も輝く、そして誇るべき魅力であるのだから、——  
——かつての誇り高い人間<sup>あなた</sup>たちに出て、今の人間<sup>あなた</sup>たちには出来ない訳が無い。そうでしょう？」

そして、その手を振り下ろした時

「……全軍……——突撃ッッ！！！！！！」

——……呼び出された魔の大軍が一斉に動き出す。

それは“絶望”という感情を呼び起こすだけでしかない報せだった。

『——こちら要塞『ギルアレッド』司令部より帝国防衛本部へ！！ 現在、結界の突然の喪失と共に突如現れた多数の魔物に完全に包囲された！！ このままでは城壁を突破されるのは時間の問題だ。至急援軍を派遣されたい！！』

発せられる声は落ち着いて聞こえるが、隠しようも無い焦燥が察するに余るもの。それもそのはずだろう。

何故なら魔道大国・ライアス帝国。その首都レイザを中心にした正方形の四方の頂点の一つの結界の始点を守護する要塞。国を魔物から護る盾たる結界の原因不明の消失。そして、そこからもたらされた火急の報せは、ただでさえ各方面に引つ張りだこで腰の重い常備軍にして迅速な対応を迫るものだった。

『こちら防衛本部、了解！！ 早急に援軍を送る。詳細を伝えよ』

『——とてつもない大軍だ！！ 今まで見たことも無い位に！ 城壁の外は皆魔物で埋まっちゃってるッ！！ 何とか水際で食い止めることには成功してはいるが今にも喰い破られそうだ！！』

『現在動員できる戦力を及給的速やかにそちらへ送る。飛竜航空隊、魔道航空隊がそちらへ急行する！！ 直ぐに傭兵団も派遣するが、到着まで何としても持ちこたえよ！！』

「了解した！！——聞いたか野郎ども！！ 死にたくなけり

や、なけなしの魔力込めて一発でもいいからブチ込め！！ 撃てば当たる位にうじゃうじゃ居やがる！！」

砦を打ち壊さんと梯子をかけようとしてくる食人鬼の姿を見て、薄々ではあるがこの怪物どもの裏に何かがいることを確信しながらも指示を出す。

『了解です（サー・イエッサー）ッ！！』

無線で告げた命令に頼もしい返事が返ってきて、その士気が今だ高いことに安堵と満足を感じた。

彼等がいる限り、此处は落ちない！！

「少将、アレは！？」

そうして指さす先を見て、思わず叫んだ。それは高速で接近する魔物の姿。

「あれは……翼竜？！ しかも、何て数だ……今度は“空”からか……。砲台ッ！ あの空飛ぶトカゲを撃ち落としてやれ！！ 各空戦部隊に伝達！！ 地上の援護をいったん中止、迎撃準備！！」

『了解。あの糞つたれ共のケツに残らずブチ込んでやりますよ！！』

唸る銃声。魔力弾として格別の威力を発揮すべく込められた砲弾

が上空へ一斉にばら撒かれる。

少なく無い数の翼竜が肉片として四散するものの構わず突っ込んでくる。

触れるだけで裂けてしまいそんな鋭い牙が、同胞の仇を討つように砲手の頭をかみ砕く。

うなる翼が首を弾き飛ばす

そんなケダモノどもを待ちわびたかのように魔術師たちが踊りかかる

下では大混戦だ。城壁を素手で登ってくる化け物たちを突き殺すと槍を肉に突き入れる。

だが、何か所では守り切れずに、突破を許して幾人かは腸を抉られ階下に奔めく魔物の群に放り込まれて貪られる。

そして、そんな化け物共を魔法で焼き払い、その焼き払われた獲物に組み敷かれて共に業火に包まれる

—— そんな、地獄がそこにある。

この要塞『ギルアレッド』は、正に人と魔物の生存競争の縮図となっていた。

そう、大戦争だ。華やかさなど無い。ただただ生き残りを駆けた。人魔の大戦争が繰り広げられていた。

人はあらん限りの憎悪を向け、容赦の無い畜生として。魔物はあらん限りの醜悪な嗜虐を持って、圧倒的な強者として。殺戮の埧と化した。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1855v/>

---

～サっちゃんの異世界流浪～

2012年1月12日19時45分発行